

凡例

一、抑も西洋史を我國人に授くるの業たる極めて難事たり、況んや  
 中學相當の學年に西洋史の完全なる知識を教授せんは豈に  
 容易ならんや、蓋し西洋史たる數千年に亙れる歐米各國の  
 駁なる事實を網羅せる者なれば其浩瀚なる一朝一夕に講じ得  
 べき者にあらず、僅かに二三の事實を究むるにも數年の歲月を  
 要するは其常なり、中學に於ける歴史教授の困難なる之が爲め  
 なり、故を以て中學に於て西洋史の一斑を授けんには師たる者  
 能く前後の事情を慮り簡に失せず煩に流れず、一定の期限内に  
 於て、太古より現今までの沿革一斑を明瞭に了解せしむるを務  
 めざる可らず、本書は即ち其請に應せんが爲めに現れたるもの  
 なり、

一、本書は著者數年中學歴史科の實地教授に當りたるに基き編集

凡例

明治三十二年十一月三十日  
 内交



したるものなり、故に敘述の簡易、長短成るべく中學の課程に相當せんことを務めたり、

一、本書は中學四年級に於て一週三時間を課する者を標準とす之を以て一時間に概ね三ページを課する時は一學年の内に全體を了讀するを得べし、

一、本編は成るべく煩難の事項を省けるを以て教師は能く西洋史の總論則ち西洋史の性質、其年紀、地理、人種等の事に就き初めに學生に其大要を講ずるを要す、

一、本編は印刷其他の誤謬無からんことを注意したれども猶ほ大方の諸彦にして更に萬事に就き訂正補遺の勞を吝む無からんことを著者切に希望す、

明治三十二年十二月東京客舎に於て

著者識

### 校訂に就きて

同學の先輩故吉國藤吉君嚮きに西洋史の著あり。事實正確行文また流麗にして善く中學の科程に適し。良教科書の好評到處に嘖々たり。往年著者不幸中道にして玉碎せられしと雖ども本書の聲價更に其生前に異ることなかりしが。傾者文部省の外國地名人の稱呼を調査して之を一定せんことを令するに及び。從來の稱呼を用ひて記載したるものは當局の檢定に漏るゝの止むを得ざるに至れり。著者にして若し在らば之が校訂洵に易々たらんのみ。然も今や乃ち亡し。是に於て同君の令弟は單に是が爲めに亡兄苦心の結果たる本書が徒らに不用に屬すべきを憾みとなし。余に囑するに校訂の事を以てせらる。余は先輩の書に筆を加ふるを好まざる



を以て辭する所ありしも。當書中地名人名の稱呼を變更するの範圍に於て校訂せんことを求めらるゝに及び遂に之を諾するに至れり。一は余が本書を用ひて教授すること數年に及び、多少植字の誤若くは記憶の謬と見るべき箇所につきて私に校正せし所ありしに因みたるなり。今にして之を思へば校訂の結果として止むを得ずおこりたる變化又少からず金玉を變じて瓦礫となしたるの罪輕からざるなきを畏る今責任を明かにせんが爲めに左に之を述べん。

一、頁數に於て十四を増したるは、多少事實を加へたるにもよると雖ども、主として英をイギリスとし、佛をフランスとするが如き場合甚だ多かりしが爲めに起りたる結果なりとす、從てさきに吉國氏が定め置きたる教授豫定に變更を來すことなし。

一、記述の順序上前後せしむるの却て便なるべきものは之を改めたり。

一、二三の著者記憶の謬ともいふべき所は之を改めたり。

一、時代の區分は改めたる所多し。

一、挿繪の數を増加して以て一層學生に記憶の便を計れり。

一、頁數に於て他の教科書より多き所以は、一頁の行數を減じて學生をして見易からしめんとしたるが爲めに起りしなり。

一、特に注意すべき年、人名、地名、事物名は學生をして容易に之を辨ぜしめんが爲めにゴシック體を用ひたり。

明治己亥十一月下浣

校訂者識



訂改 西洋史目次

第一部 上古史(太古より紀元四七六

年に至る)

一頁

第一篇 上古各國民興亡時代

第一章 上古の國民と其地理

一

第二章 エジプト並に西南アジア諸國民の盛衰

四

第三章 ヘルシア國の勃興

一〇

第四章 ギリシア國民の勃興

一三

第二篇 ギリシア、ヘルシア對抗時代

一八

第一章 ギリシアとヘルシアとの衝突

一八

第二章 ギリシアの内訌と隣邦

二二

第三章 マケドニア王國の顛末

二七



第四章	ギリシアの文化	三三
第五章	イタリア民族の發達	三六
第三篇	ローマ雄勢時代	三九
第一章	ローマ國勢の發展	三九
第二章	ローマ内訌の發端	四五
第三章	ケーザルとローマ共和政の末路	四九
第四章	ローマ帝政時代の狀況	五四
第五章	歴代の諸帝とキリスト教の興隆	五七
第六章	ローマ帝國の分立と西ローマ帝國の滅亡	六一
第二部	中世史(紀元四七六年より同 一五一七年に至る)	六四
第一篇	西ヨーロッパ諸國の起原及びサ ラセン國勃興の時代	六四

第一章	ゲルマニ種族の大移動と諸王國の形成	六四
第二章	東ローマ帝國とペルシア及びゲルマニ 種族	六七
第三章	サラセン國の勃興	七〇
第二篇	ローマ法王權伸張時代	七四
第一章	ローマ法王とフランク國王	七四
第二章	フランク王國の分裂とノルマンの侵寇	七八
第三篇	ローマ法王權全盛時代	八一
第一章	神聖ローマ帝國と法王權の發達	八二
第二章	十字軍	八九
第三章	イギリスとフランスとの關係	九四
第四章	中世時代社會の狀況	九八
第五章	蒙古族の入侵	一〇二



第四篇 法王權失墜して諸國王權伸張

せし時代

一〇七

第一章 中世紀新國民の勃興

一〇七

第二章 諸國王權の伸張

一一〇

第三章 オスマンリ、トルコ族の勃興

一一七

第四章 文運復興

一二〇

第五章 航海發達と新陸地の發見

一二四

第三部 近古史(紀元一五一七年より

一八一五年に至る)

一二九

第一篇 宗教改革及び殖民競争の時代

一二九

第一章 宗教改革

一二九

第二章 新教の成立と諸國に於ける宗教改革の

狀況

一三五

第三章 ポルトガル、イスパニア兩國の殖民

政策

一四一

第四章 オランダの獨立とイスパニアの衰運

一四六

第五章 フランスの宗教内亂と王權の發達

一五〇

第六章 三十年戦争

一五四

第二篇 フランス強盛時代

一五八

第一章 フランスの強大

一五八

第二章 オランダの隆盛及び東洋殖民

一六二

第三章 イギリスの革命

一六六

第四章 イスパニア王位繼承の亂

一七二

第五章 イギリス、フランスの東西兩洋に於ける

殖民

一七六

第三篇 ロシア、プロシア勃興時代

一八二

第一章 ロシアの勃興

一八二



第二章 プロシアの勃興 一八五

第三章 ポーランド分割とロシアのシベリア  
經營 一九〇

第四篇 革命時代 一九四

第一章 北アメリカ合衆國の獨立 一九四

第二章 フランス大革命の發端 二〇一

第三章 恐怖時代とナポレオンの勃興 二〇八

第四章 フランスとヨーロッパ列國 二一六

第五章 ナポレオンの再興とウィーン會議 二二三

第四部 近世史(紀元一八一五年より  
現今に至る) 二二七

第一篇 革命の餘波ヨーロッパ列國に及  
びし時代 二二七

第一章 平和恢復後のヨーロッパ列國 二二七

第二章 フランス七月革命と其餘波 二三四

第三章 フランスの二月革命 二三九

第四章 ドイツ及びイタリアに於ける革命  
運動 二四四

第五章 フランス帝國の創設とトルコ問題 二四九

第六章 イタリアの統一 二五三

第七章 北アメリカ合衆國南北の戦争と南アメ  
リカの變遷 二五七

第二篇 列國實力競争の時代 二六三

第一章 プロシア、オーストリアの争覇 二六三

第二章 プロシア、フランス戦争と其影響 二六八

第三章 ロシア、トルコ戦争 二七六

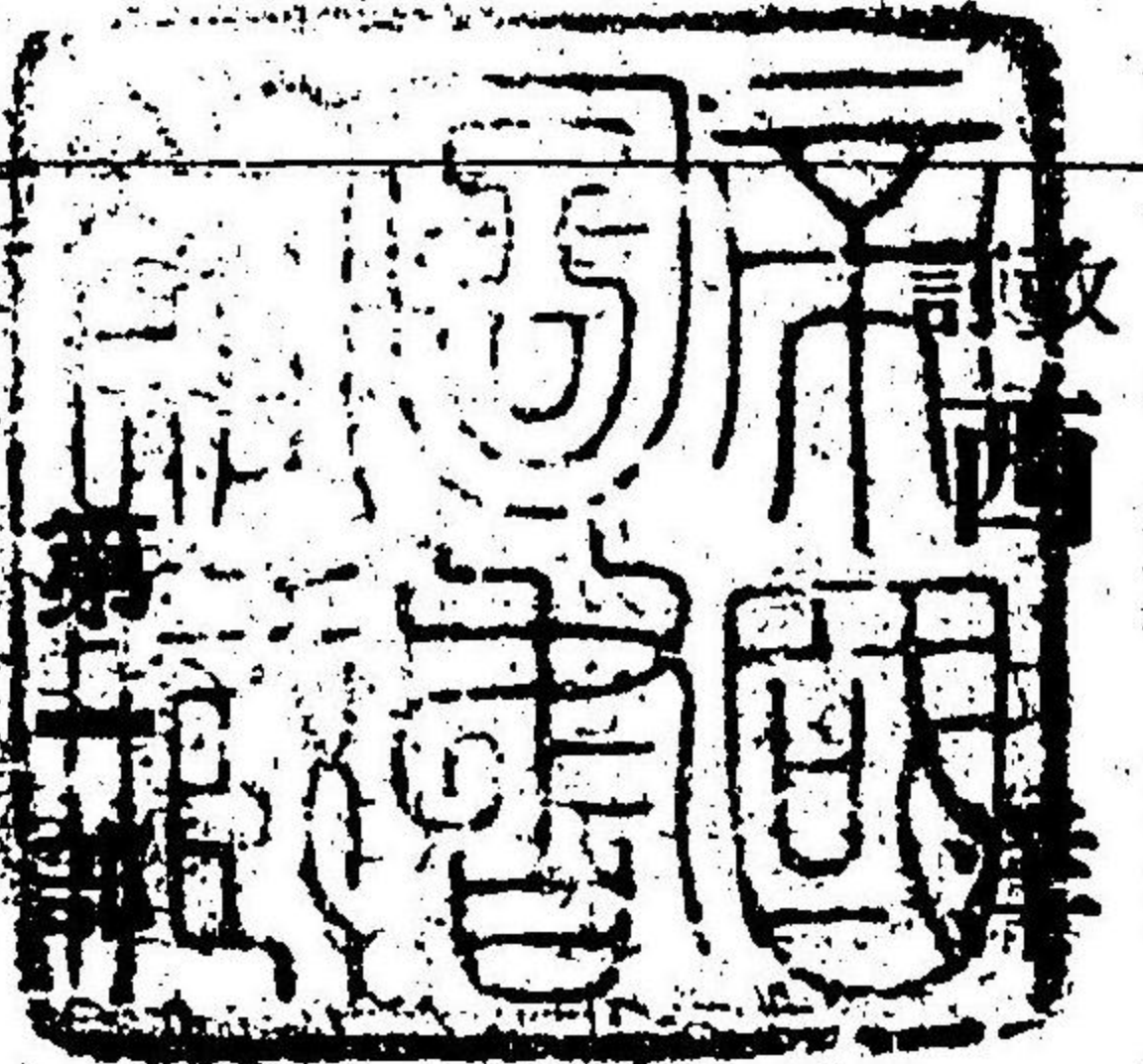
第四章 最近西洋諸國の形勢 二八〇

第五章 東洋に於ける西力 二八七



改訂西洋史目次終

史



文學士 吉國 藤吉 編著  
文學士 和田 鼎 校訂

上古史(太古より紀元四七六年  
に至る)

第一篇 上古各國民興亡時代

第一章 上古の國民と其地理

上古國民發達の理由  
歴史創草の時に當て東洋の支那、インド地方及び西洋のエジプト、メソポタミア地方は人文夙に發達す、是れ蓋し此等の地方に存せる天然の狀況の致せる所にして溫暖なる氣

第一章 上古の國民と其地理



上古の主な  
る國

候と土地の膏腴とは耕さずして穰々たる産物を生じ、加之  
 河流國內を貫通して交易運輸の便を與へ、朦昧なる人民を  
 して漸次文化の域に向ふに適せしめたり、故を以て太古此  
 等の地方に國を成せる者數十に下らずと雖も西洋史上に  
 關する主なる者を擧ぐれば北部アフリカのエジプト、西部  
 アシアのアルメニア、メソポタミア、バビロニア、アッシリア、シ  
 リア、フニキア、パレスチナ、メディア、ペルシア等なりとす、而し  
 て稍や後れて發達したるをギリシア及ローマなりとす、  
 エジプトにはニールの大河ありて自ら國內を上下の二部  
 に區分せり、此國素と荒漠たる砂地に過ぎざれどもニール  
 河が年々一定の時期に氾濫して土地を豊饒ならしむるを  
 以て夙に民族の繁殖を來せり、西南アシア地方にはナグリ  
 Tigris

上古諸國の  
狀況

上古國民の  
生活、思想

ス及びエウフラートの二大流、ヘルシア灣に注ぎ、西に地中海  
 東にカスピ海ありて水運交通の便備はり幾多の國民を土  
 着せしめたり、ギリシア、ローマの二國は内地に山岳多く三  
 方海に面して交通に適せるを以て他國民の移住を促し、諸  
 州競争の結果著しき文化の發達を見るに至れり、  
 此等の地方に國を成したる上古國民の主なる者はエジプ  
 ト人、バビロニア人、アッシリア人、フニキア人、ヘブライ人、ヘル  
 シア人等なり、此等國民の生活は其初め狩獵を業としたり  
 し、が灌漑の便を知るに及びて漸次に農業工藝の發達ある  
 に至れり、又其思想の如きも概ね粗大にして自然力に司配  
 せられ、從て宗教の如きも日月及び天然物の崇拜を普通な  
 りとす、只エジプト人が靈魂不滅を信じ、又ヘブライ人が一



神教を信じたるは稍々進歩したる者と謂ふべし、

第二章 エジプト並に西南アジア諸國民の

盛衰

エジプト

エジプトは最古開明の國にして建國の年代は詳かならざれども、紀元前三四千年の頃既に歴然たる王朝の存せるありて世々メンフィスに都せり、紀元前一〇〇〇年の頃アジア地方の遊牧人種ヒクソスなる者襲來してエジプトを征服し、之を領すること約五百年に及びたりしが偶々南方テトベの人民起りて遂にヒクソスを國外に追放して新王朝を創設したり、爾來ラメセス二世の如き明君位を繼ぎ力を四方の經略に用ひしかば外には領土擴張し、内には都府の壯觀

ヒクソス  
(ヒタ)

Memphis

Hyksos

Thebes

Kanes II

エジプトの  
政體風俗

藝美術等頗る見るに足るものありき、  
エジプト人が上に獨裁の王を戴き、その下に僧侶、武士、平民の三階級を設けて、貴賤尊卑の別を嚴にし、以て社會の安寧を維持したるは、政治思想の進歩せるを示し、尙今日に遺れる金字塔(王の墳墓)方尖碑、螺旋殿、獅身人面像の如き千古の壯觀を一瞥せば、エジプト國民の工藝技術の如何に宏壯雄大なりしかを知るに足るべく、又象形文字を發明して石に刻み、或はパピルス(原紙)に書し、靈魂輪廻の説を守るところより、屍體防腐の術を知り、又太陽曆を發見せし等世界文化の上に著しき影響を及ぼせり、  
然れども紀元前六世紀に及びてペルシアの爲に亡ぼさる、  
フニキア人はレバノン山の西、地中海の東岸、狹長にして農

フニキア

Lebanon



メ  
フニキア  
文化の特色

業に適せざる地域に住せるを以て太初より航海の術に長じ、山野の良材は自ら造船の業を發達せしめたり、故を以て商工業は殆ど此國民の専有する所にして沿岸幾多の市港は爲に富裕を極め殊にシドン、チルの兩港夙に其名高し、然れども國內小市邑の聯合より成り各世襲の王を戴き全國の統一無かりしが紀元前九七〇年の頃ナル王ヒラム大志を懷きて全國を風靡し隣邦ヘブライ國王ソロモンと好を通じて紅海を越えてインド交通の路を開き、インドの豊饒なる物産は益々フニキア國を富ませり、王は加之機に乗じて地中海上到る處の沿岸諸島に殖民地を創設し、一時海上の全權を握れり、アフリカ北岸の有名なるカルタゴ市は實に其一なり又、ジブラルタルを越えて遠くイギリスに達し

Gibraltar

Carthage

Solomon

Hiram

Sidon

Tyris

以て各地の産物を運搬し自國の發明製造にかゝる硝子、布類、金屬細工、染料等と共に上古國民の間に販賣せり又通商上の必要よりして音韻文字を發明して今日西洋諸國言語の根源を作れり、

ヘブライ  
ヘブライ人  
の一神教

ヘブライ人は、エウフラト河の西、パレスチナの地に住し、夙

Hebrew

Euphrates

Palestina

に一神教を奉じたるが、飢饉と他教徒の迫害により、難をエジプトに避けたりしも、エジプト人の虐待に堪へず、紀元前

一三二〇年頃、酋長モーセに從て此地を去り、パレスチナに

Moses

來りて國を建て、十二の種族に分れ、教政一致の政體を用ゐたり、紀元前一〇五五年頃、王政となりダビデ王をの子ソロ

David

モン王、共に英邁にして國勢大に張り、エルサレムの都は、壯觀を呈したり、ソロモン殂して内亂起り、イスラエル、ユダヤ

Jersalem

Israel

Judea

イスラエル  
ユダヤ



バビロニア

の二王國に分裂し、互に干戈を交ゆるに至りし以來、國勢大に疲弊し、遂にアッシリアの爲めに滅ぼさる、  
 エウフラト、チグリス兩河の地方に國したるを、バビロニア及びアッシリアの二國とす、バビロニア人は農工を以て國を建て、紀元前二〇〇〇年頃より、國勢盛なる一大王國となり、其都<sup>Babylon</sup>バビロンは隆昌比類なかりしが、紀元前一五〇〇年頃、北方の殖民地なるアッシリアが、漸次獨立して一大國となり、ニヌアに都して近傍を攻略するに及び、屢々戰を交へ、遂に前第七世紀に至りて滅ぼさる、  
 バビロニア人は、性質殺伐なりしも、建築彫刻の如きは宏壯を極め、又夙に度量衡の制備はり、楔形文字を使用し、瓦の製造、水道の術等、大に發達せり、殊に其刺繡の如きは、最も有名

バビロニア文化の特色

アッシリア

なるものなりき、宗教は多神教にして、就中<sup>Baal</sup>パール神の崇拜盛なりき、

アッシリア人は人種政體宗教言語文字風俗バビロニア人と大同小異にして素と争鬪を業とせる蠻民なりしが獨立して後勢ひ一變し、バビロニアを滅し更にシリア、パレスチナ、フェニキア等を占領し尋でエジプトをも征し、當時アッシリアの勢四隣に轟けり、然るに幾何も無くしてバビロン府知事<sup>Nabopolassar</sup>ナボポラサル、メデア王と謀を合せ紀元前六〇六年ニヌア府を撃ちて終にアッシリア王國を滅ぼし宏大なる領土は北部はメデアに屬し南部は新バビロニア王國の有に歸せり、爾來バビロン城は舊觀に復し<sup>Nebuchadnezzar</sup>ネブカドネザル王の時に國勢頂點に達したれども王の死後忽ち衰へ遂にペルシアの

新バビロニア



侵す所となりて滅亡せり、

### 第三章 ペルシア國の勃興

メチア

カスピ海の南方イラン高原にメチア及びペルシアの二國起れり、紀元前八世紀の頃アッシリアの勢盛なりし時に當ては兩國共に其羈絆を受けたりしが幾何も無くメチア國民叛し、獨立して國家の統一を完ふし、ペルシアを服し其子キ阿克サレスの世にアッシリアを滅ぼし一時メチアの勢大に振ひしに紀元前六世紀の中葉ペルシアの勃興するに至りて忽ち衰頽せり、

ペルシア

ペルシア建國の主をキロスとす、スーサに都す王メチアを略し次で紀元前五四六年、リヂアの都サルデスを陥れ、紀元

Cyris

Susa

Lydi

Sardes

ダリオス一世

前五三八年にはバビロニアを滅ぼし、更にパルチア、バクトリアの地方を征服し、東境はインド河に達し、以て王國の基礎を固ふせり、其子カンビセスの時紀元前五二五年エジプトを徇へたるが死後國內亂るゝに及び、王族ダリオス再び統一して位に登る、ダリオス一世の時に軍道を開き運河を通じ驛傳を設け全王國を二十州に區劃し、各州に知事將軍を置きて之を統御せしめ、其下には地方人士を登用し、別に巡察使を置きて批政を監察せしめ、王自ら全國を總攬したり、

Darius I.

Satrap

ペルシアの風俗宗教

ペルシアの國民は、尙武の氣風に富み、又王に對しては極めて忠誠の性を有し、統一を好み、又被征服國の人民に對しては、寛仁の態度を取り、之を虐遇することなく、舊習及宗教



の信仰を抑壓する事なかりしを以て、其統一の業は着々と  
して進みたるなり、  
ペルシアの宗教は、ザラツストラの開きたる教にして、經典  
をゼンド・ヴァスタといふ、善惡の二神を立て、宇宙は善惡二神  
の争闘場なりとし、吉凶禍福悉くその勝敗によると信ぜり、  
ペルシヤ人寛仁の氣風は、この宗教の感化力多きに居ると  
稱せらる、

當時西方には既にギリシア國發達して小アジア沿岸に殖  
民地を設けたりしにキロソス王の時此殖民地をペルシアに  
併せたり、然るにダリオス王の代にギリシア殖民地に叛亂  
起り、此に東方のペルシア王國と西方のギリシア國と始め  
て交渉の端緒を開けり、

ギリシア殖  
民地とペル  
シアとの交  
渉

#### 第四章 ギリシア國民の勃興

ギリシアの  
地勢

ギリシアは國內山岳多く地勢自ら三部に區分せらるゝと  
雖も沿岸は屈曲甚しくして良港灣に富めり、從て内地に於  
ては夥多の小國民互に割據せるの傾きあるに反して沿海  
の住民は夙に航海に熟し、隣邦との交通を營み、各地に殖民  
し、文化の發達に頗る便益を有したり、ギリシア國民は自ら  
ヘレネスと唱へ素と北方より移住し來り先移の土人ペラ  
Pelasgians  
スゲを排斥して全國に繁殖したるものなるべく其主なる  
種族をドリリア族、及びイオニア族の二派なりとす、南部ギリ  
シア(一名ペロ)のラコニア州Dorian Ionianスパルタ府はドリリア族の本據  
Peloponnesus Laconia Sparta  
にして中部ギリシアのアナカ州Atticaアテネ府はイオニア族の



ギリシア政體の種類

中心たり、國內割據の住民は其初め各獨立の王を戴き漸次  
進歩して貴族政治に移り更に共和の組織に傾けるもあり  
又時に僭主タイラントの一時國權を弄するもあり、然れども言語風俗  
宗教等の一致せるありて全國民は他國に對して團結する  
の情甚だ強し、

ギリシア人の宗教

ギリシアの宗教は寧ろ神話にしてギリシア人は人性を具  
備する諸神宇宙に存在せる者と爲し、オリンポス山に住す  
るゼウス神等の十二神を以て特に尊しとなす、又深く、神託  
を信じ、デルファイに於けるアポロ神の託宣特に有名なり、此  
神祕を保護せんが爲めに、アンフィクティオンAmphictyonyと稱する宗教會  
議起り、各州の委員年々デルファイの神殿に會合するの例を  
作り、五年毎にオリンピアの大祭を執行し盛大なる競技を

催ふすを常とせり、孰れも、皆全國民の集合を促すを以て一  
方に競争進歩を促し一方に割據の國民を結合するに與て  
力ありしものなり、(紀元前七七六年をオリンピア祭の始)而してギ  
リシア正史の起原は實にスパルタ及びアテネ二府の發達  
なりとす、

スパルタの發達

スパルタは素と北部に住したるドリリア族がペロポネソス  
に南下して創建したる都府にして舊來の土民は悉く其征  
服する所となり或は商工農に變じ或は全く奴隸に貶せら  
るゝありと雖ども其の數は遙かにスパルタ府民に勝れり、  
故を以てスパルタには夙にリコルゴスの制定せりと唱ふ  
る憲法ありて一は治國の綱領を示し一は多數の被征服者  
を鎮制するの策として國民教育を嚴にせり、即ち上に二人

リコルゴス憲法

政府の組織



尙武的國民教育

の王ありて政教軍事の大權を掌握すと雖とも下に元老院及び全市民の公會ありて國家の大事を議し五人の監督官エフォロス Aphorosありて國有財産を管理しまた王の罪を彈劾するを得るの權を有せり國民の教育は身體の訓練に重きを置き男子の生るゝや前途の健全なるや否やを検し羸弱なるは山間に棄てゝ顧みず健全なるは七歳より父母の膝下を離れて國家に於て教育し始めは全く武術體育の修練を旨とし後は兵士と同じく公共の生活を爲さしめ結婚若くは財産の如きは政府總て之を監督し務めて質朴剛勇不羈廉直の性を養はしめたり此憲法の結果スバルタは勇武を以て四隣を驚かし遂に南部ギリシアの覇權を握る一強國となれり之と全く反對の性質を有し相頡頏するに至りし強國をアテ

アテネの發達

ホとす、

アテネはアチカアチカの首府にして初め王を戴きたりしがドリ  
ア族南移の影響を受けたる以來共和政に改め統領アルクオン Archonを選び  
て國政を委ねたり後に統領の數を増して九人となし任期  
を一年とせしも皆私利を貪りて庶民を虐げ特に其一人な  
るドラユドラユ Dracoが峻嚴なる法典を制して人民を苦めしかば國民  
大に憤り遂に之を廢して紀元前五九四年賢明の聞えある  
ソロンソロン Solonを舉げて國政の改革を委任したりソロン職に登り  
て力を民事に注ぎ民權の自由を主張し更に憲法を改正し  
人民の等級を四級に分ち以て貢ふ所の義務に輕重あらし  
め又民會をして法律の發布統領の選舉に干涉し得るの權  
を有せしむるに至れりソロン功成りてアテネを去るや貴

ソロンの改革



ピシストラ  
トス

族平民の軋轢甚しく遂に平民黨勝を制し、首領ピシストラ

*Pisistratos*

クリステネ  
ス

トス國權を握りて僭主となりゾロンの憲法を擁護して開  
明進歩の方針を執り大にアテネの隆盛を來せり、紀元前五  
一〇年クリステネス統領となり社會大改革を勵行し全然

*Cleisthenes*

共和の策を執り、全國を十區に分ち各區より五十人の代議

*ostracism*

員を出して公會を組織し以て國事を決し、又祕密投票の法

を設けて非違者を國外に追放し以て社會の安寧を保持し

たり、爾來アテネ民族は進取の氣象に富み其發達頗る著し  
く中央ギリシア皆其威風を仰ぐの有様となれり、

第二篇 ギリシア、ペルシア對抗時代

第一章 ギリシアとペルシアとの衝突

ペルシア侵  
撃を企てた  
る由來

ギリシア國が内に漸く發達するの時に當り主義性質を異  
にし勢力を西方に張らんとするペルシアと衝突するに至  
れり曩に小アジア沿岸のギリシア殖民地がペルシアに併  
せらるゝや殖民地の住民は毫もペルシアの政に服せず紀  
元前五〇〇年機に乗じて叛したれば本國アテネの人民進  
んで之を援けたり、ペルシア王は直に兵を發して之を鎮定  
し更に復讐を名としてギリシア侵撃を企てたり、

紀元前四九二年ペルシア王ダリオスは大軍を遣はし海陸

*Darius*

兩道よりギリシアを攻む、事大に敗る、王再び大軍を整へ紀

マラトンの  
戦

元前四九〇年アテネ府の北東マラトンの野に上陸せしめ

*Marathon*

たれどもアテネの勇將ミルチアデスの爲めに全軍悉く敗

*Miltiades*

る、王之を聞きて大に怒り更に大軍を集めて自らギリシア



クセルクセス自らギリシアに向ふ

を侵撃せんとし中途にして死せしかば其子クセルクセス父の志を継ぎ紀元前四八〇年自ら大軍を率ゐてギリシアに進撃し來れり、是より先きアテネの名士テミストクレスは國防の必要を認め衆議を排して海軍を擴張して再舉に備へたりしが茲に於てギリシア諸州はコリントに會議し遂にスパルタは陸兵を以て國險を守り、アテネは海軍を以て敵を防ぐことに一決したり、此に於てスパルタ王レオニダスは直に精兵三百を率ゐてテルモピレの難關を守りたれども敵兵間道より進み來るに際して衆寡敵せずレオニダスは士卒と共に枕を列ねて國難に殉せり、國防の術茲に盡きしかばテミストクレスはアテネの老幼婦女を南方ペロポネソスに送り、血氣の士卒を船中に集めサラミス灣に

テルモピレの戦

ダスは直に精兵三百を率ゐてThermopylaeテルモピレの難關を守りた

Thermopylae

Leonidas

サラミスの海戦

Salamis

プラテーエ一の戦

於て大に敵の戦艦を敗る王惶惶爲すに所無く、陸兵若干を一將に託して留め自ら本軍を率ゐて陸路本國に歸れり、翌年スパルタの將パウサニ阿斯及びアテネの將アリステデスの指揮せる追撃兵はペルシアの殘兵をプラテトエ一の野に撃ちて大に之を破り、又海軍はミカレ岬にペルシア艦隊を剿滅しペルシアの大計畫は茲に全く水泡に歸し去れり、

戦後アテネは國威大に張りアテネ府の壯觀舊に倍し、軍港を増設しイオニア族の沿岸諸州を糾合してデロス島に同盟を結びて盟主となり紀元前四六六年キモンは同盟艦隊を率ゐてペルシア軍を敗りアテネの武威大に揚がれり、ペルシアは戦後内訌起りて疲弊し紀元前四四九年アテネと

年スパルタの將パウサニ阿斯及びアテネの將アリステデスの指揮せる追撃兵はペルシアの殘兵をプラテトエ一の野に撃ちて大に之を破り、又海軍はミカレ岬にペルシア艦隊を剿滅しペルシアの大計畫は茲に全く水泡に歸し去れり、

Pausanias

Aristides

Plataea

Mycale

戦後のギリシア

戦後アテネは國威大に張りアテネ府の壯觀舊に倍し、軍港を増設しイオニア族の沿岸諸州を糾合してデロス島に同盟

Delos

Cimon

アテネの方針

を率ゐてペルシア軍を敗りアテネの武威大に揚がれり、ペルシアは戦後内訌起りて疲弊し紀元前四四九年アテネと



ペリクレス  
時代の状況

和を結び小アジアにあるギリシア殖民地の獨立を確定せり、  
此時に當てアテネの名門にペリクレスあり、非凡の英才を懷きてアテネ府民の指導者となり、文武の諸制度を改良し、力を民政に盡せること前後三十餘年の久しきに及び純然たる民主政治を完成せり(紀元前四六四—四二九)世に之をペリクレス時代といふ此時代にアテネ府は只に政事軍備に於てギリシア諸市の牛耳を握るのみにあらずして實に文學美術工藝貿易の中心たり、千古の偉觀と稱せらるゝギリシア古代の文藝多くは此時代に發揚せり、

第二章 ギリシアの内訌と隣邦

アテネ、スパルタ不和  
の原因

アテネの隆盛日に昇りギリシア全國を睥睨するの傾きあるを見、スパルタ府は大に快からず、アテネ、スパルタの間自ら内に相對峙するの勢を呈せり、偶々コリント州が其殖民地なるコルキラ島と紛紜を生ずるに當り、アテネはコルキラに與し、スパルタはコリントを援け、紀元前四三一年公然兩國及びその同盟の間に一大内亂を生ずるに至れり、之をペロポネソス戦争といふ、

ペロポネソス  
戦争

アテネ城内  
の疫病ペリクレス死す

戦の起るやスパルタは直にアテネを攻めて之を圍む、アテネは堅牢なる城壁と強大なる海軍とを楯とし艦隊を派遣してペロポネソス沿岸を襲はしめ、陸兵悉く籠城せり、然るに城内に疫病起りペリクレスを始め幾多の將士之が爲めに斃るゝの時に際してスパルタ軍の侵撃愈々急なりしか



シラクサ遠征

アテネ降て  
ギリシアの  
覇権スバル  
タに移る

ばアテネは遂に止む無く五十年間の休戦を約したり、然るにアテネの策士アルキピアデスは譽を一身に集めんと欲し、アテネ府民を煽動して休戦の約を破り、遠くシチリア遠征を企てスバルタの殖民地なるシラクサを撃ち、事成らずしてアテネ艦隊はエゴスポタミの戦にスバルタの將リザンドルの爲めに大敗せり、節操なきアルキピアデスは、スバルタに走りて却て本國を攻めしめ、後又アテネに歸へり、ヘルシアの援兵を借らんとして成らざりき、當時アテネは極端なる民主々義の弊を生じ、國論一定せず、漸々衰運に傾くを見て、反對の諸市共に之を攻め、紀元前四〇四年遂にアテネ城の重圍陥り、アテネは降て和を媾じ、全府舉げてスバルタの左右する所となり、民主政治は廢せられ、三十人の僭主

ヘルシア再  
び小アジア  
を併す

ヘルシアの  
策略

スバルタ遂  
に敗れてヘ  
ルシアに讓  
る

を戴くに至り、ペロポネソス戦役の終ると共にギリシアの覇権はアテネを去てスバルタの掌中に歸するに至り、到處に民主政治を斃して貴族政治を立て、横暴を極めたり、ヘルシアにては内亂起り、王弟キロス小アジアの大守として兄アルタクセルクセスと位を争ひ、兵を募り、軍事を擧げたるArtaxerxesに果さずして死し、ヘルシアの衰狀あらはれしを以てスバルタ王アゲシラオス兵を以て小アジアを攻め、大にヘルシア軍を破る、然るにヘルシアはギリシアのテヘベ、コリント、アルゴスの三州がスバルタの聲威を嫉むを察し、アテネと共に三州を誘ふてスバルタに抗せしむ、爾來スバルタ軍は四面敵を受けて屢々敗れ、終に紀元前三八七年和議を結び、小アジア殖民地とキプロス島をヘルシアに割讓し、ギリシ



ア諸州の獨立を認めたり之をアンタルキダスの條約といふ(スパルタ密使の名により)に至り、スパルタの覇權全く地に墜ちたり、

テーベの霸權

當時北部の一州Thebesテーベにてはスパルタが貴族黨を助けて

ペロピダス

專横なるを怒れる共和黨の名士Pelopidasペロピダスはアテネの應

援により兵を以てスパルタ守兵を城外に退け貴族政を倒

エパミノン  
ダス

して民主政を立てBoeotiaボイオチア諸市の盟主となれりスパル

タ王兵を擧げてテーベを攻めたるに愛國の志士Epaniondasエパミノ

ンダスの爲めに紀元前三七一年Leuctraレウクトラの野に敗られ

テーベは一躍してギリシアの覇權を掌握せり然るにペロ

ピダス、Thessalyテッサリアに戦没し尋でペロポネソス征服の時エパ

ミノンダスも亦Manineaマンチネーアの戦に斃れしかば國家の二

柱石を失ひて國勢頓に消沈し、遂に隣邦マケドニア王國の侵す所となれり、

### 第三章 マケドニア王國の顛末

マケドニア  
王國の勃興

ペロポネソス戦争以來ギリシアの諸州が互に猜忌争鬪の餘自ら衰頹を招き、ヘルシア又内訌相つぎて衰ふるに當り

遂に北方のMacedoniaマケドニア國をして其隙を伺ふの機を得せしめたり、

マケドニアはギリシアの疆外に位し、人民はギリシア人と蠻族との混淆にして從來爲す所無かりしが紀元前

フィリポス  
王の事業

三五九年Philipフィリポス王位に登るや雄略あり深くギリシアの文物制度を愛慕し自らギリシアの盟主となりて統一を計

らんとしPhalanxファランクスと稱する槍隊を組織し、近方の蠻族を



フィリポス  
遂にギリシ  
アの覇權を  
握る

フィリポス  
大元帥とな  
りヘルシア  
遠征を企て  
果さずして  
卒す

征して領土を廣め、偶々ギリシアのフォキス人テーベの羈絆を脱せんと欲して紛擾を起すに際し、此にギリシアの内政に干渉するの端を開けり、  
フィリポスはフォキス人を討ずるを名として直に神聖軍を興してギリシアに侵入す、時にアテネの名士デモステネスあり夙にフィリポスの大志あるを察し、熱血滔々雄辯を奮つて諸州を遊説し、アテネ及びテーベの同盟軍を募りてフィリポスに抗したり、然るに紀元前三三八年ケイロネアの大戦に同盟軍敗績し、ギリシアは遂にフィリポスの左右する所となれり、フィリポス即ちギリシアの民心を得んが爲めに南方コリントに列國會議を開きてギリシア諸州の自治制を許し、自らギリシアの元帥と號し、此機に乗じてヘルシア遠征

アレクサン  
ドルの遠征

ガウガメラ  
の戦

を企てんことを令したりしが、紀元前三三六年臣下の爲めに刺殺せられ其子アレクサンドル年甫めて二十にして立て職を繼ぎ諸州の叛亂を鎮定し遂に列國に推されて元帥となれり、  
紀元前三三四年アレクサンドル大軍を率ゐてヘルシア遠征に向ふ、當時ヘルシアは國勢衰運に傾き亦昔時の餘威無し、此歳グラニコスの一戦にヘルシアの大軍を破りて小アジアを服すヘルシア王ダリオス三世之をイッソスに防ぎて大敗す、アレクサンドル軍を南に轉じ、シリア及びフェニキア地方を略し、エジプトに進んでアレクサンドリア府を創設し、更に東方ナグリズ河畔に向ひ紀元前三三一年ガウガメラの大戦にダリオスの軍を敗るダリオス三世バクトリア



アレクサン  
ドル、イン  
ドに至る

に逃れ臣下の爲めに弑せられペルシア全土アレクサンドル  
の有に歸す即ちバビロン<sup>Babylon</sup>城に入りて暫らく兵を憩ひ、茲  
に東方の極端に達せんと志を起し、新たに兵を組織して  
紀元前三二七年インドに向ひ、途に嶮岳激流を跋渉して遙  
かにインド河畔に達したり、此時士卒の勇氣既に沮喪し更  
に不毛の地に進むを欲せず遂にアレクサンドルに迫りて  
海路ペルシアに歸り、アレクサンドルも止むなく殘兵を率  
ゐて陸路バビロン府に着したり、

アレクサン  
ドル大統一  
の企畫

アレクサンドル茲に於て大統一の企畫を講じ、バビロン府  
を以て東西兩洋に跨がる大帝國の首府と爲し、國道を開き、  
水利を設け、堤防を築き、沼澤を埋め、着々國益を増進すると  
共に宗教の調和と人種の雜婚とによりて東西兩國民の融

東西兩國民  
の融合

アレクサン  
ドル病死す

化を計り、親らペルシア王の女を娶りて皇后と爲し、部下の  
將士をして之に倣はしめ、盛にギリシアの文化を東方に輸  
入し、以て一統の政を施さんことを務めたり、之を以てギリ  
シアの言語風俗は一時全帝國內に普く行はれ、又東西の士  
卒を混入し附與するに同權を以てせしかば兩國民の混化  
大に進めり、然るに天此人に年を借さず紀元前三二三年ア  
レクサンドルは歳僅かに三十二にして終にバビロン城に  
病死したり、短年月の間によく東西兩文化の融合を計りた  
るは世界史上の重要事件にして大王の稱空しからずとい  
ふべし、

大王死後の  
狀況

アレクサンドル殂するや其子幼にして業を繼ぐに足らず、  
之を以てアテネ先づ叛を謀りたれども忽ち鎮定せられた



アレクサン  
ドル大帝國  
の分裂

り、然れども帝國の各地を領せるアレクサンドルの諸將は幾何も無くして紛擾を來し、殘忍なる戦争となり、爲めにアレクサンドルの一族悉く害せられたり、紀元前三〇一年イッソスの戦に因りて紛紜一決し廣大なるアレクサンドルの帝國は大約左の如くに分裂せり、

シリア王國

(一)シリア王國、セレウコス家を領し、主に故マケドニア王國のアシア領より成り、セレウキア及びアシナオキアの二都府あり、然れども此王國も漸次に瓦解し、東北パクトリア、パルチア國先づ分立し、次でユダヤ國南部に獨立し、アンタオコス三世の時に小アシアをローマに讓り、帝國の疆域後にはシリア二國に止まるに至り遂にローマの屬領となる、

エジプト

(二)エジプト、プトレマイオス家の領にしてアレクサンドリアを首府とし、世界商業の中心となり、ギリシア文學の淵藪となりしも、後同じくローマに屬するに至る、

マケドニア  
及ギリシア

(三)マケドニア、及びギリシア、永年の戦争を経てアンタオニス家マケドニア王國を領するに至り、ギリシアはエトリア同盟アカイア同盟を起して臨時の施政なりしが、マケドニア王國と共にローマに併せらる、

第四章 ギリシアの文化

ギリシアの  
文化發達の  
因由

上古のギリシアが其名千古に朽ちざる所以の者は常に史王夙開の國たるを以ての故に非ずして實に此地に發達したる工藝美術並に文學が絶妙を極めて他に其類を見ざる



建築及彫刻

を以ての故なり、蓋しギリシアの風光其宜しきを得、國民の生活簡にして自ら智能を啓發するの餘裕ありしと、各地互に競争心に富みしとの致す所なり、ギリシア人の手に成れる工藝美術は精巧眞に迫り、其思想の現れたる文學は深遠幽奥を極め、後世人をして賞歎措く能はざらしむるものあり、

工藝技術の絶妙に達せるを建築及び彫刻なりとす、而して其最も隆盛を極めたるはアテネに於けるペリクレスの時代なりとす、ペリクレス時代の建築を代表せるはアテネのアクロポリス城にして左右に並立せるエレクテラウム、パルテノンParthenonの兩神殿は實に千古の美觀なりと云ふ、又殿内神像の彫刻はフィディアスPhidiasの手に成り其精巧古今に冠たり、

ホメロス

哲學  
ソクラテス

史學  
ヘロドトス

美文

文學は太古既に詩聖ホメロス出でてイリアッド及びオディッセイOdysseyの二大名篇を後世に傳ふ、この二篇はギリシア人の聖典として尊崇せしところなり然れども其最も隆盛を極めたるはペリクレスの代に在りて哲學、史學、美文の三者特に著し、哲學は初め小アジアに起りソクラテスSocrates（前四九九）に至りて眞正哲學の基を開き、尋て其門にプラトトンPlaton（前三四二）及びアリストトテレスAristotle（前三八四）の二大哲學者相前後して出で遂にギリシア哲學を完ふし、今日科學の淵源となれり、史家には史祖ヘロドトスHerodotosを始めツキヂデスThucydides、クセノフォンXenophon等の名家あり、又美文は敘事詩、敘情詩の二者夙に發達し、アテネ全盛の頃には戯曲其妙に達し、エスキロスAeschylus、ソフォクレスSophocles、エウリピデスEuripides、アリストファネスAristophanes等の名士輩出したり、又文學旺盛の餘



アレクサン  
ドリアに於  
ける科學の  
發達

り辯説の術頗る發達し演劇も大に行はる、後ちマケドニア時代に至りてエジプトのアレクサンドリア府に科學大に起り特に文典、數學は著しく發達せり、數學の名士として其名後世に轟ろけるエウクリッド及びアルキメデスの二人は實に此時に出でたるなり、  
*Euclid Archimedes*

第五章 イタリア民族の發達

イタリアの  
諸種族と其  
地理

ギリシア衰へてイタリア民族之に代りて覇權を握るに至れり、イタリアは地勢自ら上中下の三部に分れ、太古より夥多の民族割據せり、北部にはエトルスキ種族住し、中部にはイタリア民族繁殖し、其主なるをラチニ、及びサピニ、ウンブリア、サムニター等の種族とし、南部並にシチリア島にはギリ  
*Tuscan Latin Sabin Umbri Samnite Sicily*

ローマ府の  
起源

シアの殖民多く住せり、ラチニ、サピニの兩種族がエトルスキ族と混淆してチベル河畔に居を定めたる者は是れ即ち後にイタリア半島の主權を握りたるローマ府の起源なり、建國の年代事蹟詳ならざれども紀元前七五三年を以てローマ史の初めとなす、

ローマ王政  
の組織

ローマ人は初め王を選擧し之に終身政權を附與し、王は三百人より成れる元老院を組織し以て國事を議するの顧問たらしめ重要なる事件は貴族會に諮問せり、貴族は兵役に従事し、政務に參與し、征服せられたる外人は悉く之を平民と稱し、毫も參政權なかりき、然るに多年星霜を経るに従ひ平民の數著しく増加して貴族を壓倒するの勢に至りしかば紀元前五七〇年の頃時の王セルウィウス・ツリウスは憲法  
*Comitia Curia Patrician Plebeian Servius Tullius*

ツリウス王  
の改革



を改正し、貴族平民を均しく階級に分ち、兵員會Comitia Centuriataを設けて貴族平民共に兵事を議するの制を立てたり、然れども貴族等之を喜ばず遂に紀元前五〇九年王を廢して共和政となし、大權を二人の執政官Consulに委ね任期を一年とするの制に變じたり、

貴族平民の對抗

此政變に際して貴族は再び全權を握りて平民の境遇舊に復せんとす、此に於て平民は公然貴族に對抗し、紀元前五世紀以來ローマと隣邦との戦端屢々起るに乗じて平民は貴族に逼りて其特權の伸張を計り、遂に護民官Tribuni Plebisを設け、平民議會Comitia Tributaを組織するの權を得、又政府の要職に容喙するの道を開けり、偶々紀元前三九〇年ガリアに住したるガリア人南進して上イタリアを侵し更に中部に入り、遂にローマ府を焼き

ガリア人の侵入

リキニウスの改革  
貴族平民の争全く止む

之を掠奪しローマの舊記悉く灰燼に歸す、ローマ府民如何ともする能はず漸く重幣を以てガリア人を去らしむるを得たり、爾來ローマは内に相闘ぐの不利なるを感じ、護民官リキニウスLiciniusの時貴族平民共に同權なるを一定したるより兩者永年の軋轢茲に氷解し、國內始めて安堵の思を爲すに至れり、

### 第三篇 ローマ雄勢時代

#### 第一章 ローマ國勢の發展

國內の紛擾一たび輟みて國民の一致團結成るやローマの勢頓に國外に發展するに至れり、ローマ人は爾來外戰に従事すること五十餘年、遂に中部イタリアを平げ、南部イタリ



サムニター  
戦争

ギリシア殖  
民地との戦  
争

エピロス王  
ピロス入寇

アを併せ、ローマの一都府變じて全イタリアの大都と化するに至る、當時ローマの東方にはサムニターの蠻族あり、南方にはギリシアの殖民ありて共にローマの強敵たり、紀元前三四三年ローマはサムニター種族と戦端を開き、前後三回の決戦を経て遂に全種族を服し、紀元前二八二年イタリアの地を悉く平定したり、時に南方ギリシア殖民地の本據たるタレントゥム府に於てローマの船舶府民の爲めに難に遭ふ、ローマ即ち其罪を鳴らし兵を發して之を責む、タレントゥム救を本國のエピロスに請ふ、エピロス王ピロス直にイタリヤに出陣してローマ軍を討ず、ギリシア精兵並に象軍の勢頗る猖獗にしてローマ軍屢々敗績したりしがピロスはシナリアにシラクサを助けてカルタゴと戦ひて敗れ、紀元前二七五年ベネベントの大戦にローマ軍大に勝ちてピロス王本國に逃れ歸れり、茲に於てかギリシア殖民地全くローマの滅ぼす所となり、イタリヤ半島殆ど平定したり、當時シナリア島にありてはギリシアの殖民地なるシラクサとカルタゴと覇權を争ひたりしが、偶々シナリア島のメサナにマメルナニと稱する海賊の寇するありシラクサ之を攻めたるを以て海賊援をローマ、カルタゴに乞ふ、ローマ兵茲にカルタゴの兵と衝突し兩國交戦の端緒を開けり、世に之をポエニ戦争と稱し、百餘年の久しきに亙れり、紀元前二六四年第一ポエニ戦争起る、ローマは海軍の遙にカルタゴに劣る所あるを以て急に戦艦を造り、將士を遣はしてカルタゴの海軍と交戦すること數回、紀元前二四一年

ギリシア殖  
民地滅ぶ

ポエニ戦争  
の原因

第一ポエニ  
戦争

元前二七五年ベネベントの大戦にローマ軍大に勝ちてピロス王本國に逃れ歸れり、茲に於てかギリシア殖民地全くローマの滅ぼす所となり、イタリヤ半島殆ど平定したり、當時シナリア島にありてはギリシアの殖民地なるシラクサとカルタゴと覇權を争ひたりしが、偶々シナリア島のメサナにマメルナニと稱する海賊の寇するありシラクサ之を攻めたるを以て海賊援をローマ、カルタゴに乞ふ、ローマ兵茲にカルタゴの兵と衝突し兩國交戦の端緒を開けり、世に之をポエニ戦争と稱し、百餘年の久しきに亙れり、紀元前二六四年第一ポエニ戦争起る、ローマは海軍の遙にカルタゴに劣る所あるを以て急に戦艦を造り、將士を遣はしてカルタゴの海軍と交戦すること數回、紀元前二四一年



カルタゴ敗れて和を媾す

第二ポエニ戦争

ハンニバル

カルタゴの海軍大敗して和議を結びローマは償金と共にシナリア島を占領したり、此損耗を償はんが爲めにカルタゴの將軍ハミルカル、バルカスは遠くイスパニアを征して遂に之を服し銀鑛を發掘し地を拓き兵を養ひたりハミルカル歿して其子ハンニバル職を継ぎ、大軍を率ゐてローマ遠征を國中に令す、第二ポエニ戦争茲に始まる、紀元前二一八年ハンニバルは六萬の兵を指揮してイスパニアを發し、南方ガリアの地を過ぎてアルプスの嶮を躡え直にイタリアに進入す、沿道の市民皆震慄してハンニバルに降り、ローマの諸將悉く北イタリアに敗らる、紀元前二一六年カンネーの大戦にはローマ軍殆んど鏖殺せられローマの命運旦夕に通る、府民今や老幼を問はず劔を肩にして國事に殉せ

ハンニバル冬陣を構へ形勢一變す

ハンニバル大敗す

ハンニバル本國に召還せらる

んとするの秋に際しハンニバルが急にローマ府を襲はずしてカプアに冬陣を構へ暫らく兵を憩ひしの一事は大に彼我の形勢を一變し、ファビウス等の諸將は三軍を整へ、大にハンニバルを破れり、ハンニバルは孤軍萬里援兵なく糧食乏しきが爲めに勢屈するに當り偶々ローマの勇將コルネリウス、スキピオはイスパニアに出陣してハンニバルの弟ハズツルバルの軍を破りてイタリアへの連絡を杜絶し、イタリアに凱旋して直にアフリカ大陸に軍を向けカルタゴを圍む、茲に於てハンニバル遂に素志をイタリアに果たさずして本國に召還せられ、紀元前二〇二年ザマの戦にハンニバル大に敗れて和を媾じ、約するにイスパニアを割讓し軍艦を毀ち、莫大の償金を納るゝを以てし、又ローマの許



カルタゴ大に屈す  
マケドニア並にシリヤ兩國ギリシアと共にローマに滅ぼさる

可無くんば軍を動す無きを誓ひ、漸く局を結びたり、カルタゴの勢茲に至て全く消沈せり、ローマが着々西方の大權を握るに當て東方マケドニア國王<sup>Philip III</sup>フィリポス三世エジプト、ベルガモン等を略せんとす諸國を攻めて大に之を破り、ギリシアの覇權を棄てしめ償金を取りマケドニアの勢を挫く、偶々シリヤ王アンタオコス三世は曩にザマの戦に敗走したるハンニバルを容れて大に爲す所あらんとす、ローマの將スキピオ<sup>Scipio</sup>（スキピオの養子）之をマクネシアに討ち取り翌年和しタウルス山以西<sup>地</sup>を割かしめたり、マケドニアは其後屢々反したるも紀元前一四六年遂にローマの滅ぼす所となる、此時ギリシアも同

第三ポエニ戦争

カルタゴ遂に滅ぶ

じくロドスの屬領と化しぬ、

紀元前一四九年カルタゴは和議に背きてローマの同盟國なるヌミヂア<sup>Numidia</sup>と干戈を交ゆ、ローマ乃ち兵を出して其罪を責めカルタゴ城を明け渡して内地に移らんことを求む、カルタゴ市民大に之を憤り必死となりてローマ軍に抗す、之を第三ポエニ戦争とす、然れども紀元前一四六年遂に征服せられ城廓悉く破壊せられてローマの屬領に編入せらる、茲に至りてローマはヨーロッパの三大半島を始め遠く小アジア、アフリカに其威を振ふに至れり、

第二章 ローマ内訌の發端

ローマが海外征服を完うして國勢を伸張するや既に紛擾



ローマ府民の腐敗

の兆あり、蓋しギリシアの如き文明國の征服は自ら其文化をローマに輸入し、幾多の文人技術家陸續として來り以て文化を誘導し、加ふるに諸處の屬領より納むる貢物は著しく富を増加し自ら府民をして奢侈に流れしめたり、故を以て顯官貴族若くは屬領の太守は賄賂私曲によりて大なる富力を兼有するに反して小民の状態は戦争と人口の増加と奴隸仕用法の輸入とにより日に益非にして、昔時の貴族平民權利の争は今や一變して貧富間の黨争とはなれり、茲に於て時の護民官チベリウス、グラックス及び其弟カイウス、グラックスは土地制度を發布して大に小民の境遇を高めんことを謀りしに惜ひ哉貴族の憎む所となり二人前後閔族の爲めに殺さる、

グラックス兄弟殺さる

ヌミデアとの交戦

此時に當てローマはヌミデア王ユグルタの暴慢を攻めんが爲めに戦端を開き、貧民黨の領袖マリウス紀元前一〇七年出征して之を服すつぎてゲルマニ種族の侵入せし時マリウス又之を撃ちて大勝を得威名甚だ高し、偶々此機に際してローマ府外のイタリア諸民族はローマの市民權を得んことを迫りて叛す、貴族黨の領袖スルラはマリウスと共に征討し漸く之を鎮定したり、斯く兩黨の首領各其功を奏するの曉には互に相競ふの傾きを呈するは自然の勢にして遂に之が爲めに内亂を惹き起すに至れり、其端緒は實にミトラダテス六世の役なりとす、ミトラダテスは東方ポントス國王にしてローマの多事なるに乗じて兵を出して小アジアのローマ領を占領し進でギリシアに入り勢頗る猖

マリウス、スルラの兩雄互に功を奏して相競ふ

ミトラダテスの役



マリウス、  
ルラ二人の  
争

獷なり、茲に於てローマの元老院は時の執政官スルラを征討總督に任じたるに貧民黨大に激昂して元老院に迫り、終にスルラの任命を取消してマリウスに委ねしむ、スルラ即ち軍を率ゐてローマに入り、マリウスを討ちて之をアフリカに追ひ、直に東方ポントスに向ひ大にミトラダテスを破り小アジアに渡りてさきに奪はれたる地を恢復したり、この隙に乗じてマリウスはローマに歸りスルラ黨を殘殺し財産を奪ふ、然とも幾何も無くしてマリウス没し、キンナ其後を繼ぎたれどもスルラが東征を完うしてローマに凱旋するに當てキンナは直に逃れ、スルラ全權を握りてマリウスの殘黨數千人を戮せり其酷虐を極めたる古來稀なりしと云ふ、スルラ國政を弄する久しからずして紀元前七八年

ローマの慘  
狀

遂に没す、

第三章 ケーサルとローマ共和政の末路

ポンペイウ  
スの功業

スルラの軍將にポンペイウスあり非凡の勇才を懷き出でてイスパニアにマリウスの殘黨セルトリウスの軍を破り又クラッスと共に當時ローマ人の娛樂となしたる格闘者の一團隊相結びて一揆を企てたるを剿滅し、地中海を横行せる海賊を鎮定し、更に東方ポントス王ミトラダテスの再叛を討ちて悉く之を服し、進てアルメニア、シリア、パレスチナ地方を徇へ、西南アジアの領土を鎮定し威名隆々としてローマに凱旋せり然れども元老院は東征の功を是認せざざしを以て富豪クラッス及び貧民黨の領袖ユリウス、ケー

Julius Caesar



ケーザルの  
出身

ザルと提挈するに至れり、

第二三頭同  
盟

ケーザルは紀元前百年貴族の門に生る、明敏、果斷、智勇兼備の英雄にして、貧民黨の領袖たり紀元前六〇年ローマの柱石たらんとの大志を懷き、當時威望赫々たるポンペイウス及び富豪クラッススの兩人と結託して第一三頭同盟<sup>Triumvirate</sup>を組織し、ポンペイウスはアフリカ及びイスパニアを治めクラッススはシリアを治しケーザルはガリアの太守たらんことを約し、紀元前五八年ガリア地方に出陣したり、つぎてクラッススはバルナアを征して大敗して死しポンペイウス一人ローマに止まる當時ガリア地方には夥多の蠻族住し性慥悍にして容易に服せず、ケーザル不世出の勇略を奮て之が鎮定に従事すること前後八年其間遠くブリタニア島をも征

ケーザルの  
ガリア鎮定  
と治蹟

Britain

ケーザルロ  
ーマに歸り  
遂に大權を  
掌握す

し、終に能くガリア地方を平定したり、彼がガリアの蠻民にローマの文化を注入すると共に北邊の國防を嚴にしヨーロッパ中部の蠻地にローマ文化の根本を創設したるは其偉蹟實に千古に朽ちざる者と云ふべし、  
ケーザルの威名北方に轟くを見ポンペイウスは私に之を嫉み遂に元老院に迫りてケーザルの職を免ぜしむ、ケーザル大に憤り直に大軍を率ゐてローマに歸り、ポンペイウス恐れて元老院議員を伴ひギリシアに逃る、茲に於てかイタリアの全土忽ちケーザルの掌中に歸せり、ケーザル即ちイスパニアのポンペイウス黨を平げて更にポンペイウスをギリシアに追撃し紀元前四八年遂に之をフルサルスの野に破るポンペイウス逃れてエジプトに走り土人の爲めに

フルサル  
スの役

Pharsalus



ケーザル刺殺せらる

殺さる、ケーザル依てエジプトに上陸して其黨與を滅ぼし、東方諸國を平定し紀元前四五年ローマに凱旋す、  
 ケーザルの歸るや總督ProconsulとなりまたインペラトルImperatorの稱號を得て政教文武の大權を掌握し、兵制、法律、殖民、商工、學術等百般の改善進歩を計りしが不幸にして威望を嫉むもの共和政治の顛覆を憂ふるもの相結託し紀元前四四年ブルツス及びカシウス等の爲に元老院に刺殺せらる、然れどもケーザルが眞に國家を思ふの深かりしことは彼の死後大に國民の感ずる所となりしかばブルツス等はギリシアに逃走せり茲に於てケーザルの甥なるオクタウィアヌと武臣アントニウス及びレピダスの三人は此氣運を利用して第二三頭同盟を結び以て國內の統御を謀れり、三人茲に於て

第二三頭同盟

オクタウィアヌ、アントニウス、オクタウィアヌを争ふ

オクタウィアヌ全權を握りて遂に帝政を創設す

ルツス及びカシウスの兩人をフリジに破り、後ち互にローマ領の分轄を始めたりしが幾何も無くしてレピダスはオクタウィアヌに降り、アントニウス獨りエジプトに據りてオクタウィアヌに對抗せり、偶々アントニウス、ローマの國憲に背きて領土をエジプトの女王クレオパトラCleopatraに割讓せしかばオクタウィアヌ之を名としてエジプトを征し、紀元前三一年アクチウムの海戦にアントニウス大敗して自刃しエジプトは遂にローマの縣となる、今やオクタウィアヌは全國の主權を一身に集め、他に雌雄を争ふの勇者出でざるに乘じ、故ケーザルの素志を繼ぎて帝政を創設したり、ローマの政體茲に至て一變せり、



### 第四章 羅馬帝政時代の狀況

オクタウィ  
アヌスの方  
針

オクタウィアヌスは共和政の外形の下に君主の實權を握り元老院よりアウグスツス(尊稱)の尊號を得て、政教の大權を總攬し、宣戰媾和の大任を司り、元老院、民會等をして一に皇帝の鼻息を伺はしむ、帝聰明睿智にして在位四十三年帝國の憲法を制定して治民國防の策を講じたれば、羅馬大帝國の基礎全くアウグスツスの一代に成りぬ、

帝亦深く文藝の増進を奨励せしかばギリシアより傳はりて漸次發達の域に向ひたる、ローマの文藝は此に一時に勃興して、ローマ文藝の精華を來し、領内夥多の人種概ね帝の施政に安んじ、甘んじて其化に浸染したるを以て海内到る

帝國の基礎  
成る

ローマ文藝  
の發達

基督の降誕  
羅馬帝國  
と境外の蠻  
族

處政治、文化の統一を見ざる無きに至れり、故を以て聖代の餘德自ら文學、美術の發達を促がし、Virgil ウルギリウス、Horace ホラチウス、Ovid オウィヂウス等の詩人、Livy リウウス、Tacitus タキツス等の史家皆此時に出でて、ローマ文學を後世に代表し、又寺院、劇場、大會堂、宮殿等の建築一として善美を盡さざるは莫し、又帝の治世中紀元前四年パレスチナに、Jesus Christ 耶穌基督の降誕ありき、

ローマ大帝國の隆盛夫れ此の如しと雖も國境外には當時幾多の蠻族は漸く勃興して四方に割據せり、殊に北方ゲルマニ種族は其勢頗る勇猛なり、アウグスツスは初め攻勢を取りドナウ川以北に退けしも一敗の後是等の蠻族を征服するの策を執らずして境上に城砦を設けて其侵入を防ぐの方針を執れり、紀元一四年アウグスツス死し、爾後數世養



良帝時代

マルクス、  
アウレリウ  
ス

帝國の衰運

子を以て継ぎしが紀元六九年シリアの將ウスバシアヌス  
 帝位に登りブリタニア、ユダヤ等を征し紀綱大に張りたり  
 爾後八帝の時代は良帝相つぎ殊にツラヤヌスはドナウ河  
 の右岸にダキア州を置きバルナアを征しローマの盛榮其  
 極に達せり又マルクス、アウレリウスはゲルマニを撃退し  
 またバルナアを征し遠く支那後漢に交通を開き内文學、技  
 術を奨励して後世ローマ黄金時代と稱せらる紀元一八〇  
 年アウレリウス死してよりディオクレティアヌス帝の即位紀  
 元二八四年に至るの百四年間は所謂悪帝時代にして軍隊  
 勢力を恣まにし内訌外患並び至り國勢大に衰ふるに至れ  
 り

キリスト教  
の起源

第五章 歴代の諸帝とキリスト教の興隆

イエスキリストは紀元前四年を以てユダヤのベスレヘム  
 に生れ自ら神の子にして救世主なりと稱しユダヤ教の弊  
 害を除かんが爲めに新宗教の宣布を唱導したり、  
 當時パレスチナはローマに屬し古來一神教を奉じたるユ  
 ダヤ人はローマの苛政に沈淪するの餘り神使の降下して  
 Jews  
 ユダヤ王國を復興するの機あるべしとの妄想を懷き、ユダ  
 ヤ教も又弊害多くして當時の人心に満足を與へざるもの  
 ありしを以て遂にキリストの新宗教を見るに至れり、然れ  
 どもユダヤ人之を異端なりとし遂に磔刑に處せり、その使  
 徒四方に散布して傳道に従ひ紀元第一世紀の中葉に至り



キリスト教  
興隆の原因

遂にローマ府に入れり然れどもローマ人は多神教と皇帝の崇拜を神聖視したるを以てキリスト教を喜ばず歴代の諸帝キリスト教を虐待すること甚しかりしも人智の進歩は從來の宗教に満足せざるあり且つキリスト教の有せる世界的の精神がローマの如き一大帝國の統一に適したると、其高僧、信者の忍耐力とは遂に此宗旨の興隆を來すに至りたる原動力なりとす、

キリストに十二人の徒弟あり、キリストが政府の罪する所となりて磔刑に處せらるゝや、徒弟は身命を賭して教理を保護し、各地に遊説して大に盡す所ありき、特にセント、ポールはシリアのアンチオキアを本據として異教者の改宗に力を注ぎ、ペテロはパレスチナのユダヤ人に教義を傳ふる

十二使徒の  
盡力

キリスト教  
會の組織

を務めたり、キリスト教が世界的の傾向を有するに至りたるは、ポールの力多きに居るなり、斯くて設けられたるキリスト教教會の組織は極めて簡にして全教會の總領をアポストルと稱して宗務を總轄し、又各地の教會に長老なるものあり、後にアンチオキア、アレクサンドリア、ローマの三長老は最も勢力を得るに至り、特にローマは全キリスト教の本據たるの有様を呈するに至りぬ、

紀元二八四年、ディオクレチアヌス帝位に登りて政府の組織に大改革を行ひて專制君主政治と爲し、帝國內を四區に分ち各區に王を置き、帝親ら全國を總攬し、分國の主を會して大事を議じ、ローマ古來の異教を復興して大にキリスト教を虐待したり、然れども帝の位を去るや國內忽ち亂れて帝

ディオクレチ  
アヌス帝の  
改革



コンスタンチヌス大帝  
立ちて都を  
遷す

キリスト教  
國教となる

ニケーアの  
宗教大會

位を争ふ者六人の多きに及びたりしが紀元三二三三年コン  
スタンチヌス遂に勝を制して帝權を掌握するに至り、君主  
專制政治を勵行してテオクレナフヌスの遺業を大成し、都  
をビザンチウムに移してコンスタンチノブルと稱せり、キ  
リスト教を國教と定め教會領を寄附したるは帝の治世中  
著しき現象なりとす、紀元三二五年ニケーアに始めて宗教  
大會を開き、當時キリストの一身に就て起りし異説を一決  
し、アリウス派を排しアタナシウス派を正統としたり、爾來  
キリスト教は其根據を固め、終に後年ヨーロッパの一大勢力  
となるに至れり、

第六章 ローマ帝國の分立と西ローマ帝國  
の滅亡

コンスタンチヌス帝歿して三子互に帝國を分轄したりし  
が忽ち又統一に歸し、ユリアヌス帝の時異教を復興せんと  
謀りしに當時既にキリスト教の隆盛を動すこと能はざり  
き、紀元四世紀の末ワレンス帝の代に北方ゲルマン種族大  
移動の爲に、ローマ領に侵入し來れるゴート種族を酷遇せ  
しかばゴート種族は帝をアドリアノープルに討ちて之を  
殺せり、テオドシウス帝立ちて全國を一統し、異教を嚴禁し  
て悉くキリスト教に歸依せしめたり、茲に於てか長老の職  
權大に張り、ローマ、アレクサンドリア、アンチオキアの三大

テオドシウ  
スキリスト  
教の法王制  
を定む



東西ローマ帝國の分立

西ローマの國勢大に衰ふ

諸蠻族ローマを侵す

西ローマ帝國の滅亡

長老はコンスタンティノブル及びイェルサレムConstantinople Jerusalemの二長老と共に五大法教師長Archishopと稱せられ、ローマ府の師長を特に法王Popと號して最上の法職を帯びしむるの制を定めたり、

テオドシウス帝の死後紀元三九五年全帝國を二分して二子に分轄せしめたり、長子アルカヂウスは東部を領し、次子Honorius Arcadiusは西部を保ち、茲に東西ローマ帝國は永く分立するの基を開きぬ、兩帝國は其初め極めて親密の關係を保ちしと雖も漸次に相反目するの傾きを生じたり、爾來西ローマ帝國には明君賢主出でて國教を振興する者無く、分立以後國勢日に衰ふるに當り、北方蠻族の侵入益甚しく羅馬の衰運に乗じて頻りに之を襲へり、

西ローマがイタリア以外の領土を蠻族の手に歸せしめ、朝

廷紛擾を極むるの時に當てワシヤル族は海軍を以てシナリアSardinia Corsica、サルヂニア、コルシカ等の諸島を占領し、終にローマ府に闖入して掠奪到らざる莫し、爾來帝王は兵權を握れるゲルマニ種族雇兵の左右する所となり、終に紀元四七六年其軍將オドロケルOdoacer、ローマの幼帝を廢して自らイタリアの王權を握れり、西ローマ帝國茲に於て滅ぶ、



## 第二部 中世史(紀元四七六年より同一五一七年至る)

### 第一篇 西ヨーロッパ諸國の起原及びサラセン

#### 國勃興の時代

#### 第一章 ゲルマニ種族の大移動と諸王國の形成

中世の初めに於けるゲルマニ種族

紀元四世紀の末よりヨーロッパ中部のゲルマニ種族は諸方割據の勢漸く成り、南ロシア及び黒海の邊にはゴート族國を成して東西に分れ、ライン下流にサクス族あり、ライン上流の地にアマン族あり、ライン中流附近にフランク及びブルグンド族あり、是等數十の種族が其繁殖に伴ふて新領

Burgundian

Alaman

Rhine

Saxon

Frank

地を得るの必要起るに當て中央アジアのフン族ヨーロッパ

Huns

に侵入して東ゴート族の領地を襲ひしかば茲に種族の大

Ostrogoths

移動を促がし東ゴート族は西ゴート族の地を奪ひ、西ゴ

Visigoths

トは終にローマ領に侵入したり、フンの酋長アチラはドナ

Attila

ウ河畔の地を殉へ進んでガリアを襲ひたるにゴート、フラ

Gaul

ンク等の聯合軍の爲めにカタラウヌムの野に敗れ、轉じて

Catalaunian Plain

アルプ山を踰えてイタリアを侵したれども和を容れてド

ナウ河畔に退陣したり、アチラ殂してフンの領土は忽ち瓦

解し、東ゴート族は再び舊に復するを得たり、

是より先き西ゴート王アフリクはイタリアに侵入したり

Athric

しが西ローマの攝政スナリコの破る所となりて退く、然る

Silicho

にスナリコ死してアフリク再び現はれてローマ府を襲ひ

西ゴート王國

種族大移動の原因  
フンの酋長アチラ諸方を侵す



東ゴート王國

フランク王國

アングロサクソン王國

之を荒らせり、アフリック殂してアタウルフ其の後を継ぎ西ローマ帝の妹を娶りてガリアを領しイスパニアをも併せて茲に西ゴート王國を建設したり、尋で東ゴート王テオドリクはイタリヤを侵してオドワケルを攻めて之を殺し、ラウニナを首府として東ゴート王國を建てたり、テオドリク王聰明にして外交の策に長じ大にローマの文化を奨励せしかば東ゴート王國は忽ち隆盛に赴きたり、又北方に於てフランク族は五世紀の中葉より漸次近隣を略し、メロウインガ朝のフロドウィヒ之を統一して王國を創設し、紀元四八六年ソアソンの戦にローマ軍を破りてガリア地方を占領し、アラマン族を撃ちて之を退け、フランク王國の勢頗る強大なり、此頃北海の沿岸に住したるアングル及

フンダル王國  
チュリンギア王國  
ロムバルド王國

びサクスの二族は海を踰えてブリタニア島に渡り、ケルチ種のブリトン族を撃ちて之を退け東岸一圓の地を占領して之を七州に分てり、紀元八二七年エグベルト七州を統一し、茲にイギリス王國の基を開けり、此他アフリカにはワンダル王國成り、中部ドイツにはチュリングア王國東方ドイツにはロムバルド王國起れり、此等の諸王國は皆ゲルマニ種族大移動の結果にして實に中古史を形成するに至れる發端の狀況なりとす、

第二章 東ローマ帝國とペルシア及びゲル

マニ種族

東ローマ帝國はコンスタンチヌス大帝以來久しく無事に



コンスタンチヌス大帝以後東ローマの状況  
ユスチニアヌス帝

ヘルシアとの交戦

東ゴート王國東ローマに滅ぼさる

してゲルマニ種族大移住の時にフシ、ゴート等の侵入を國外に防ぎたりと雖も内部は黨争甚だしく爲めに政治の紊亂、風俗の頹廢を來し國力日に衰ふるの傾きありしがユスチニアヌス(五二七—五六五)即位するに及びて國勢を挽回したり、帝Justinian文武の才を兼備し、當時東方ヘルシア國がホスロー一世の新王朝ササン家の配下に國勢熾なるに當て帝は其將ベリサリウスを遣はしてヘルシアと兵を交ゆること數回にして和し尋でベリサリウスをアフリカに派して、ワンデル王國を討じ紀元五三四年終に之を滅ぼし、ベリサリウスは勝に乗じてイタリアの東ゴート王國に侵入してローマ府を陥れ、進で首府ラヴェンナを降して東ゴート王を虜にす、偶々ベリサリウス本國に召還せられ、ゴート族は新たに王を立

ユスチニアヌス帝の偉蹟

法令の大成

てたれども再び東ローマの將ナルセスの破る所となりて終に其屬領となりイスパニアの南部又帝國の有に歸し東ローマ大に振ふ、  
ユスチニアヌス帝は莫大の資を投じて首府を始め帝國の邊境に城壁を築き、又廣大壯麗なるセント、ソフィアの寺院をコンスタンチノブルに建立し大に帝都の壯觀を高め、インド支那との交通行はるゝに乗じて僧侶を支那に遣はし、以て養蠶の術をヨーロッパに傳へたる等偉蹟尠からず、帝特に意を法令に注ぎ當時の法律家を集めて古代ローマ以來の律令を蒐輯し、Institutes Pandects Codeインスチテューツ、パンデクツ、コードの三部に整理して之を大成したり、所謂ローマ法は即ち是なり、然れどもユスチニアヌス帝歿して後内亂起るに乗じヘル



東ローマの  
國勢大に衰  
ふ

シア王ホスロー二世大舉來りてコンスタンチノブルを圍むヘラクリウス帝之を撃退し兩者共に疲弊す、恰も此機に際して北方のアバル及びロンバルドの兩族は漸く跋扈して東ローマ領に侵入し、ロンバルドは進んで北部イタリアを占領して茲に儼然たる王國を建て、又イスパニアは西ゴートの復する所となりて東ローマの國力頓に衰へたり、かくの如くペルシア東ローマの二大帝國衰退するに當り異種の文化を有する新進國起りて世界史上に一大影響を及ぼせり即ちサラセン帝國是なり、

第三章 サラセン國の勃興

Saracen

紀元六世紀の頃ペルシアの威風に従ひたるアラビアにサ

サラセン國  
の起原

ムハメットの  
勃興

回教遂に其  
基を完うす

ラセン國起れり、其建國の祖をムハメッドと爲す、アラビアは地勢荒漠にして人民頗る慄悍なり、宗教は多神教にして偶像を崇拜せしが、ムハメッドは五七一年メッカに生れ、ユダヤ教及びキリスト教の教理を參酌して自ら神使なりと揚言して説くにイスラム教回教を以てしたり、メッカの政府之を迫害し六二二年ムハメッドをメヂナに追ふ、此歳をイスラム教の紀元(ヘジラといふ)とす、然れども其説く所アラビア人の性情に適したるを以て忽ち衆望を得、ムハメッドは其信者を率ゐてメッカ府を襲ひて之を陥れ、偶像教を打破してアラビアの統一を謀り、茲にサラセン王國の基を完うしたり、ムハメッドはかくて政教の大權を掌握したるが六三二年死



ハリファ歴代四方の攻略に従ふ

西南アジア並にエジプト共にハリファの有に歸す

す、其繼嗣者をハリファと稱しユーラン(回教聖典)と劔とを以て領土の擴張と布教とに従ひ被征服者にしてイスラム教を奉ずるか若くは朝貢を肯んずるに非ずんば悉く之を劔に掛くるの方針を執り、六四一年ヘルシヤ軍をネハヴェンドに敗りて之を滅し第二代ハリファ、オームアルの時に東ローマの領地なるシリア、パレスチナを滅ぼしてイェルサレム、アンナオキア等の舊都を悉く占領したり、尋でエジプトも其有に歸し、オンマヤ朝の祖ムアウヤ全權を握るに至りてアフリカの遠征を完うし、七一七年時のハリファ、スレーマンは海陸兩軍を率ゐてコンスタノブルを圍みたれども城堅くして終に果さずして止む、

是より先きイスパニアの西ゴット王國は漸く衰運に傾き

サラセン人ヨーロッパに侵入しイスパニアを占領す

サラセン人フランク國相に破らる

コルドバのハリファ獨立

しかば此機に際してサラセン人はジブラルタルの海峡を越えてイスパニアに入り、七一年西ゴット王國を滅ぼして之を占領したり、茲に於てサラセン人は七三二年ピレネー山脈を踰えてフランク國ニ侵入したるが時のフランク國相**カロロ、マルテル**の破る所となりて軍を退け、依然イスパニアを保てり、

オンマヤ朝のハリファは都をダマスク府に定めたりしが七五五年アッバス朝起りてオンマヤ朝を攻めしかばオンマヤ朝は逃れてコルドバに獨立し、アッバス朝全權を握りて都を**バグダード**に奠む、爾來バグダード府は東西交通の焦點となり東はインド南洋中央アジア西は大西洋沿岸に通商を開きて頗る隆盛を極めたり、特に八世紀の末**ハルン、アル、ラ**



ハリファ統  
治の全盛時  
代

シドの時代はハリファ統治の全盛時代にして其朝廷の驕奢を極めたる古今其類稀なり、ラシッド又大に學術技藝を奨励せしかばアラビア文學の精華燦然として遙かにヨーロッパの文化に優りたるものありき然れども十一世紀に及び大に衰ふるに至れり、

第二篇 ローマ法王權伸張時代

第一章 ローマ法王とフランク國王

七一七年レオ三世東ローマの皇帝となるや外サラセンの入寇を退け内諸制度を改革し綱紀大に張れり、この時イコノクラストの亂起れり、蓋しキリスト教徒が畫像崇拜の弊に陥りしを以て七二六年レオは禁止の勅令を發したり、然

イコノクラ  
ストの亂

東西兩教の  
分立

フランク王  
國勃興の端  
緒  
ビピン、ラ  
ンゴバルド  
王國を征す

るに畫像の崇拜は蠻民の布教に便にして又教會收入の財源なりしを以て西ローマの法王グレゴリオ二世は此處置を肯んぜずして遂に東ローマと分離したり、後世の所謂ギリシア教とラテン教(一名カソ)との分立實に此時に胚胎す、當時イタリアにある帝領及びローマは北方ランゴバルド人の頻りに脅かす所となり防禦に苦みしがは時の法王ステファノ三世は救をフランクの相國ビピンに請ふ、ビピン即ち其請を容れ遂にフランク王國勃興の端緒を開けり、フランクはフロドヴィヒの死後漸次國勢進みたるがメロヴィンガ朝衰へ實權は相國の手中に落ちカロロマルテルの子ビピンに至り法王よりフランク皇帝の稱號を受け、カロリంగా朝の祖となり七五四年ランゴバルド王國を討じて之



カカロ王位に登る

カカロゲルマニ種族の統一を謀り大帝國を創立す

を破り、ラヴェンナ附近の領地を奪ひて之を法王領に編入したり、七六八年ビビン殂して長子カカロ位を継ぎ、剛勇果斷文武に長じ遂にフランク王國の基礎を大成したり、  
 カカロは全ゲルマニ族を一大帝國の下に統一せんと欲し、力を隣邦種族の攻略に盡し、前後數十戰遂にサクス、ノルマン、スラフ、アバール等の豪族を平げ、イスパニアに進んでサラセン人を討じて其の北部を略し、更にイタリアに轉じてランゴバルド王國を滅ぼし、ヨーロッパ西部の一圓悉く平定したり、カカロは此大帝國の君主として傍らキリスト教を保護せしかば法王との關係極めて親密にして八〇〇年法王レオ三世はカカロに贈るに西ローマ皇帝の尊號を以てせり、茲に至てフランク王國の勢は恰も昔時のローマ帝國

カカロの施政

フランク王國の隆盛

に於ける觀あり、カカロは宏大なる帝國を夥多の州と邊疆とに區劃し、各州に太守を置きて政治を司とらしめ、特に重きを邊疆に置き、邊疆太守を派して之を守らしめ、又帝領には帝領伯を置き、常に勅使を巡行せしめて各州施政の狀況を視察せしめ、帝親ら時々巡遊して監督を怠らず、又年に一回太守僧侶等を集めて大會を開き以て全國の法律を議せしむ、帝深く學問を獎勵し、都ア、ヘンの宮殿に碩學老儒を集めて親しく文學を講じたれば帝國の文教大に張れり、又寺院を増建してキリスト教の普及を謀り、傍ら農工商を勸誘し、こゝにローマ、ゲルマニアの二分子調和の道を開きて帝國の富強日に進歩の域に向ひぬ、後世稱してカカロ大帝と號する亦故無



きにあらず、

第二章 フランク王国の分裂とノルマン人の侵寇

カロロ帝死後のフランク王国

フランク王国三分せらる

八一四年カロロ大帝歿して季子ルイス王国を襲きたるも統御の力無く在位中王国をロタール、ロハール、ピピン、ルイスの三子に分つ、偶々第四子カロロ生るゝに及びて新たに領土分轄を始め互ひに相争ひしがピピン天死せしを以て八四三年

- 一、ロタールは帝號を継ぎイタリアとロートリンゲンを得、
- 二、ルイスは東部フランク即ちドイツ地方を得、
- 三、カロロは西部フランク即ち今のフランス地方を得、

ドイツ、フランス二ヶ國の起原

其發達の差違

ノルマン人の起原

ロタール死し西北は東西フランクの分割に歸しイタリアのみロタールの子ルイス領せり又東西フランク一時合併せしも八八七年ドイツ、フランスの二ヶ國相分立するを見るに至れり、爾來ドイツは純然たる一民族の團隊として固有の言語風俗を發達せしめ、フランスはローマ、ドイツ兩族の混淆としてローマ的文化を増進し、遂に此兩國は爾後再び相合すること無くして全く異なりたる國力の發達を成すに至れり、  
これより先きヨーロッパの北岸にノルマン人起れり、後にデンマルク、ノルウェー、スウェーデン等の王国を形成せしと雖も其の初め極めて慄悍なる種族にして航海に長じ到る處に掠奪を事とし、西フランク王国を侵し國王この難に苦しむ



ノルマン人の跋扈  
ノルマンイギリスを征服す

ノルマンイ  
スランドを  
発見しアメ  
リカに到る  
ノルマンロ  
シア王室の  
基を開く

酋長 Rollo を Normandy に封じて和せり、九世紀の末イギリスに寇す、時の王 Alfred フレド勇武、善政を行ひて國家の急を救ひしも之を撃退すること能はずして與ふるに東方の土地を以てし、一〇一七年其酋長 Cnut カヌート大王全イギリスを征服して其王となり、尋でノルウェー、スウェーデン、デンマルク三國の王を兼ね其威勢頗る鋭く、當時ノルマンの跋扈其極に達したり、ノルマンは嘗にイギリスを征したるのみならず、遠く北海を縦横馳驅してイースラシド島を発見し、更に北アメリカの Greenland グリーンランドに到着して十世紀の末茲に殖民地を設け、更に進んで一時北アメリカ大陸にも殖民したりき、彼は又九世紀の中葉東方ロシアに侵入し、酋長 Rurik リリクは茲にロシア王室の基を開きぬ、

ノルマンチ  
公ウレ  
ムイギリス  
を征して王  
朝を開く

イタリア南  
部に一王國  
を設く

フランス北部のノルマンチの酋長は公爵の稱を唱へて漸く隆盛となり、偶々イギリスに王位繼承の紛紜起るに當て一〇六六年ノルマンチ公ウレムはローマ法王の許可を得てイギリスを征しヘスタングスの戦に勝ち王位を得、數年を出でずして全國を統一し、現今イギリス王朝の祖となり、イギリスをしてヨーロッパ大陸との關係益々密ならしめたり又ノルマンチの武士 Robert Guiscard ロベルト、ギスカルドは十一世紀にイタリア南部を荒掠し又東帝國を侵しその甥 Rojario ロジョリオは、シナリア島及びフランス南部に殖民したるサラセン人を破りて之を滅ぼし、シナリア島及びナポリを占領して茲にナポリ王國を建設し學術、技藝を奨励して盛大となりたり、此の如くノルマンは諸方を跋渉し、諸處に王國を設



ノルマンの  
末路

け其偉蹟見るに足る者ありと雖も彼等は概ね被征服者の  
風俗習慣に浸染するの餘り遂に其固有の特性を失し、ノル  
マンの足跡は爲めに久しからずして世上に消失するに至  
りぬ、

第三篇 ローマ法王權全盛時代

第一章 神聖ローマ帝國と法王權の發達

ドイツのカ  
ロリング朝

東フランクに於けるカロリング朝は分立以來治平を保ち  
たりしがルイスの代に至り東にスラフ族の寇するあり、北  
方にはノルマンの侵入ありて久しく之を退くる能はず、ア  
ルヌルフの代に至りて漸くノルマンを破り、進んでイタリ  
アをも服して其王となれり、其子ルイスの時にハンガリア  
Hungary

フランコニ  
ア公コンラ  
ド、ドイツ  
王位に登る

のマジール種族の侵入を征服したり、ルイス歿してカロリン  
Magyar  
ガ朝統絶え、當時既にフランクonia、サクソニア、スラヴィア、バ  
ワリア、ロートリンゲンの五諸侯はドイツ國を左右するの  
Bavaria Lohringen  
勢あり、紀元九一一年フランクonia公コンラド選ばれてド  
イツ王に登りし以來王位は永く選舉法に依りて決せらる  
るの例を開きぬ、

オット一世  
ドイツ王と  
なりて大に  
内治外交に  
力を用ゆ

コンラド王位に登りしも事意の如くならず、死するに莅み  
Conrad  
遺言してサクソニア公ヘンリー一世(九三六)立てサクソニア  
朝の祖となり、諸侯を統御して國力を養ひ、國防を嚴にし、遂  
にマジール族、ノルマン族を退けたり、其子オット一世選ばれて  
父の後を継ぎ、英邁にして治國の才に長じ、務めて諸侯の勢  
を制し、バワリア、フランクoniaの二公が叛せるに當て其領  
Bavaria Franconia



オット神聖  
ローマ帝國  
を遺絶す

地を渡りし、之を三の一族に與へ、寺院を築造して、  
教の六柱を定着したり、王以外征に力を加ふる、  
く退けて永年の外患を除き、  
之を調責せしめ、  
に至れり、王更に南下してイタリアに入り、  
るに乗じて難無く之を鎮定し、  
王をして帝冠を加へしめ、  
して名くるに、  
相一致して大帝國を統御するの意に出でたりと雖も、  
ドイツ王が兩國の主權を掌握するに過ぎざるのみ、  
後方をイタリアに注ぎ却て本國ドイツの諸侯分襲するに  
至れり、

サクソニア  
王朝絶えフ  
ランコニア  
王朝再び起  
る

コンラデニ  
世  
ヘンリ三世  
大にドイツ  
國境を廣む

然れどもオット一世の子孫相繼ぎて此茫漠たる觀念を懷き、  
力をイタリアに注ぎたれども要するにオット一世に次ぐの  
武略無くギリシア殖民、サラセン人、ノルマン、等相前後して  
イタリアの南部を領し、遂に之を平定すること能はずして  
止み、尋でサクソニア朝絶えて再びフランコニア王朝之に  
代れり、  
王國を併して國力の増長を圖り、其子  
勝りて諸侯を悉く服従せしめ、法王の位を左右し、  
ア地方をも其威を仰ぐに至らしめしかば、  
域此時代に最も大なり、然るに王殂して其子  
にして位を繼ぎ、母后其政を攝したれば自ら僧侶の干涉す  
る所となり、ドイツ帝國に於ける宗教社會の威權漸く熾ん



なるの勢を呈したり、此時に際し法王グレゴリオ七世出でて遂に法王權の伸張を完成したり、

Gregory VII.

初め法王と皇帝とは共に大統一の理想を有し、互に相助け、て權力の増進を計りしが、兩々相下らざるに及び、茲に一大衝突を起すに至れり、グレゴリオ七世は微賤より起りて法王の顧問となり、宗教社會の改革を促すと共に之を獨立せしめ、宗教界をして須らく俗界を主宰するに至らしむべしとの方針を執り、一〇七三年自ら法王の職に登るや直ちに之が實行に着手したり、即ち從來の慣例たる寺領賣買を禁じ、僧侶の獨身制度を勵行し、僧官任命權を皇帝の手より奪ひ以て皇帝をして法王の命に服せしめん事を圖れり、茲に於てか法王と皇帝との軋轢を來し議論頗る紛々たりしが、

グレゴリオ七世

ヘンリ四世と法王との軋轢

ヘンリも又英主にして王權の擴張を計りて屈せず紀元一

〇七五年ローマの宗教會議に於てグレゴリオはヘンリ四世の顧問官五人を破門したり、ヘンリ四世大に之を憤りグレゴリオの職を褫ひしかばグレゴリオ即ち帝を破問し之を國民に訴へたりしに平生帝の抑壓に對して快からざるドイツ諸侯は此機に乗じて法王に與し、アウグスブルグに大會を開き帝を廢せん事を議決したり、茲に於てヘンリは即ちカノッサ城に赴き雪中に立つこと三日、以て罪を法王に謝し、漸く其破門を解かるゝや慚愧の怒りに堪へず、ランゴバルド族の援を借りて再び法王の職を褫へり、然るに諸侯は此時新帝を選びたりしに帝之を意とせずして再びイタリアに侵入し、グレゴリオを捕へて獄に下し新たにクレメン

Canossa

Augsburg

Lombardy

Clemens III.



ヘンリ五世  
と法王

ギベリン黨  
とゲルフ黨  
の争

インノケン  
ト三世

ンス三世を立てたり、紀元一〇八五年グレゴリオオ遂に獄中  
に憤死す、ヘンリ四世乃ちドイツに還りて帝となり、其子へ  
ンリ五世又法王と争ひしが遂にワルムスに宗教會議を開  
き僧正等の任命は帝王之を推薦し法王之を敘任するに定  
めたり、一一三八年スタウフン家の祖コンラデ三世立つや、  
ギベリン黨帝王黨とゲルフ黨法王黨の二派を生じ、ドイツ  
及びイタリアニ争ひ紛擾を極めたるが、フレデリキ一世バ  
ルバロサ(一一九〇)勇略寛宏の英雄にして、ゲルフ黨の首領  
サクソニア公ヘンリを征服して封土を取り、又イタリアを  
征す、その子ヘンリの時ナポリ王國を取りしも帝權振はず、  
時に法王インノケント三世(一一九六)大志あり勢諸國の君  
主を壓し、フレデリキ二世を立て、王とせり、インノケント

法王權大に  
發達す

の死後、王と法王との争甚だしくドイツの勢衰へ、法王權益  
振張したり、

第二章 十字軍

バグダード  
のサラセン  
國大に衰ふ  
十字軍の原  
因

東方バグダードに於けるサラセン國は一時隆盛を極めた  
れどもセルジック、トルコ族ヘルシア北部に起るに及びて漸  
く衰頽を來せり、紀元十一世紀の頃セルジック、トルコ族はア  
ルメニアを略し、シリア、パレスチナ等を攻めて之を取り、進  
んでエジプトに至れり、後に此種族は小アジアを占領し都  
をイスパハンに定め其勢頗る強大なり、是より先き紀元四  
世紀の頃よりキリスト教徒はエルサレムの聖場に巡禮す  
るを大功徳とするの慣習を生し、コンスタンチヌス帝が此



法王大に諸國の民心を振興し遂に十字軍を起す

地に壯麗なる寺院を建設したる以來殊に甚しく法王權の發達に従て一層其隆盛を見るに至れり、從來巡禮者はキリスト教國は更なり異教の國民よりも厚遇を受け來りしにセルジック、トルコ族が一たび聖場を占領してより巡禮者を遇する頗る酷なる者ありしかば巡禮者は之を同胞に訴へて大に悲憤の情を起さしめき、キリスト教諸國の王侯武士を始め下庶民に至るまでセルジック、トルコの無道を憤慨するの情漸く熾なるに當て法王ウルバノ二世は慘状の目撃者アミアンの僧ペテロをしてイタリア、フランス等を巡遊して聖地救済の大策を勸告せしめ、一〇九五年ウルバノ自らクレルモンに僧俗を集め熱誠を奮て人心を激動し數千の群集立るに十字の章を取り

第一回十字軍

第二回十字軍

て肩に掛け直に出陣せんことを誓へり、是れそも中世紀の一大現象たる十字軍の發端なりとす、紀元一〇九六年ロートリシゲン公ゴドフレド及び各地の諸侯は第一回十字軍(一〇九九)を率ゐて諸道より進みてトルコ族を討ず、小アジア、シリア等に於ける戰鬪難無く勝ちて一〇九九年遂にエルサレムを攻めて之を陥れたり翌年ゴドフレド死して其弟バルドウィン職を襲ぎ始めてエルサレム王と稱し、トルコ族に對して國防を嚴にしたり、然るにセルジック、トルコ復た起りて聖地附近爲めに危きに瀕せしかば第二回十字軍(一一四七)を起し、フランス王ルイス七世、ドイツ王コンラド三世共に其指揮官たり、當時トルコ族にヌールエジダンあり勇敢剛毅にして攻略を事とし、尋



イェルサレム再びトルコに歸す

で英邁なるサラヂン其後を承けて隣邦を掠略せしかば十字軍大に敗れて志を果さず、一一八七年に至りてイェルサレム府再びトルコ族の手に歸したり、

第三回十字軍

ドイツ帝フレデリキ一世は大志を懷き法王フリポ二世と好を通じ第三回十字軍(一一八九)を企てたり、イギリス王リ

チャード一世之を援く、フレデリキは中途にして死し、リチャード再びイェルサレムを圍みたれども遂に撃退せられ、サラヂンと休戦を約して漸く本國に還るを得たり、

法王インノケント三世はフランスの武士を説きて第四回十字軍(一二〇四)を起せり、然に此軍は途上東ローマ皇帝繼承の紛紜に關涉しコンスタンチノブルを剽掠し、茲にラテン王國を立てたりしが國人との紛争爾後絶えず、一二六一

第四回十字軍

年ラテン王國は遂に又滅ぼされて遠征の目的を達せざりき、

ラテン王國

紀元一二二八年ドイツ帝フレデリキ二世第五回十字軍(一二二九)を起す、帝の勇才其效を奏して遂にイェルサレムを陥れ一時其王號を唱へたれども一二四四年又回教徒の侵略する所となれり、茲に於てフランス王ルイス九世は病中を顧みず第六回十字軍(一二五四)を興してエジプトを征しダ

第五回十字軍

ニエタ府を占領したれども翌年大敗して全軍擧て虜となり、重幣を容れて漸く國に還れり、然るに此一敗に懲りず一二七〇年ルイス九世は第七回十字軍を發しチュニスに向ひたりしが不幸全軍悉く病死したり、

第六回十字軍

爾來復た十字軍の擧無く畢竟イェルサレムの聖地は遂にキ

第七回十字軍

第二章 十字軍



十字軍の結

リスト教徒の手に入らずして止みぬ、然れども十字軍はヨーロッパ社會に抄からぬ影響を與へたり、トルコの異種族に對する念は自ら武士道の發達を促がし、東西の交通頻繁なりし爲めに貿易の勃興を生じ、之に伴ふて科學、美術等大に發達したり、特に寺院僧侶の跋扈、法王の權勢最も甚しきを極むるに至りたるは十字軍の著しき結果なりとす、

第三章 イギリスとフランスとの關係

十字軍時代に於けるイギリス、フランスの状況

十字軍時代にイギリス、フランス二國は互に特別の發達を爲せり、イギリスはWilliam I.ウィルヘルム一世王となりしより子孫相承くる殆ど百年、漸次に民權自由の伸張を遂げ、フランスは九八七年Hugh Capetフーゴ、カペー王となり、カペー朝の祖となり王權

イギリス王  
ヘンリ二世

イギリスの  
アイルラン  
ド征服

を擴張して諸侯の鎮壓に力を注ぎ機に乗じてイギリス領ノルマンディーの地を併さんとす、十二世紀の中葉Henry IIヘンリ二世立ちてイギリス王となり、Matagenetマタジネット王朝を創始するや血縁の關係に因りてノルマンディー以外の地をも領し其勢威將さにフランスを併さんとす、然るに國內の諸侯並に僧正等が常に王に反抗せるの故を以て遂に果さざりき、この時代にアイルランドはイギリスの征服する所となりぬ、

ヘンリ二世の子Richardリチャード、フランス王Philip IIフィリップ二世と共に十字軍に従ひ途上相争ひ、歸途ドイツに抑留せられ、フィリップ機に乗じてノルマンディー地方を奪ふ、既にしてリチャード許されて歸國し、位に即き、フランスと戦ひ法王Innocent IIIインノケント三



ジョアン無道にして大に民望を失ふ

イギリスの大憲法

ヘンリ三世 イギリス國會成る

世の和解によりノルマンディーを恢復す其弟<sup>John</sup>ジョアン位に登るや時のフランス王<sup>Philip III</sup>フィリポの爲めにフランスに於ける領地の殆ど全部を奪はれ遂に再び之を恢復すること能はざりき加ふるにジョアン暗愚無道にして上下の別無く臣民に重税を課したれば大に民望を失し又法王<sup>Innocent III</sup>インノケント三世と争ひ遂に法王に屈服したり此時に當て諸侯並に僧正等はジョアンの無道を抑制せんと欲し、一二一五年王に迫りて**英國大憲法**を承認せしめ、以て國民の生命財産を保護し、王權を制限するの根據とせり、是れ現今イギリス憲法の淵源にして立憲政體の基礎既に此時に成れり、ジョアンの子ヘンリ三世其後を繼ぎて亦無道の君なりしかば<sup>Simon de Montfort</sup>シモン、ド、モンフォール等は**大憲法**の實行を確定し、此時より國會は純

然たる形を備ふるに至りぬ、

フランス王ルイス九世

フランス王<sup>Louis IX</sup>ルイス九世(一二二六)賢明勇武、アルピジョアの亂

を鎮し、諸侯を抑制して王權擴張の策を執り、歴代の諸王之を守りて以て<sup>Philip IV</sup>フィリポ六世に至れり、時にイギリス王<sup>Edward III</sup>エドワード三世は其母が<sup>Philip VI</sup>フィリポ四世の女に當れるの故を以てフ

百年戦争

ランス王の位を得ん事を要求せり、然るにフランス國民舉てこれに對抗せしかば茲に兩國の葛藤を生じ所謂百年戦争(一三四三)なる者起れり、戦の始まりしより兩國互に勝敗ありしがフランス王<sup>Charles VII</sup>カロロ七世の時に至りてフランスは

ジャンヌ、ダルク

全然イギリス軍の蹂躪する所となり一時國運累卵の危きに瀕したり、此秋に際してオルレアンの市女傑<sup>Jean d'Arc</sup>ジャンヌ、ダルクは率先して國民の士氣を振興し、遂にオルレアン城の敵



圍を解きカロロをライムスに迎へて王旗を翻がへしたり、  
 シュンヌ、ダルクは敵に捕はれ焚殺の刑に處せられしと雖も  
 爾來フランスの軍勢振興して屢々イギリス軍を破り一四  
 五三年イギリス軍全く撃退せられて百年戦争茲に終れり、  
 之に因りてイギリスは只カレールCalais城市を有するのみとなり、  
 フランスは領土の恢復を爲せしに拘らず永年の兵燹は甚  
 しく朝野の疲弊を來し國內の荒漠實に悚然たる有様とな  
 りぬ、

百年戦争の結果

第四章 中世時代社會の狀況

封建制度の起原

中世時代に普く諸王國に行はれたるは封建制度にして素  
 とフランク種族が征服地を從軍の將士に分配せしより自  
 然に發達したる現象なり、其初め極めて簡單なる組織なり  
 しに漸次に進歩して遂に君臣の關係となり諸侯臣庶の連  
 絡を生じ、彼我相互の義務を負擔せり、此封建制度の間に發  
 生して中世時代を風靡したる者を騎士Knightなりとす、騎士は初  
 め封建諸侯と臣民との中間に位せる馬上の兵士にして自  
 然に一階級を組織したりしが後に宗教熱の勃興に伴ふて  
 自ら其影響を受け一層隆盛の狀を呈するに至りぬ、故を以  
 て中世時代軍人の標準となれるは即ち所謂騎士にして平  
 常城廓に居住し武事的訓練を施せり、  
 當時名門顯貴の子孫は少壯の時より騎士の城内に養成せ  
 られ武器の操縦を習ひ乗馬の術を訓練し、君侯に對して忠  
 實を盡し誠意服従するを最上の義務と心得しむ、加ふるに

騎士の發達

騎士の教育

然に發達したる現象なり、其初め極めて簡單なる組織なり  
 しに漸次に進歩して遂に君臣の關係となり諸侯臣庶の連  
 絡を生じ、彼我相互の義務を負擔せり、此封建制度の間に發  
 生して中世時代を風靡したる者を騎士Knightなりとす、騎士は初  
 め封建諸侯と臣民との中間に位せる馬上の兵士にして自  
 然に一階級を組織したりしが後に宗教熱の勃興に伴ふて  
 自ら其影響を受け一層隆盛の狀を呈するに至りぬ、故を以  
 て中世時代軍人の標準となれるは即ち所謂騎士にして平  
 常城廓に居住し武事的訓練を施せり、  
 當時名門顯貴の子孫は少壯の時より騎士の城内に養成せ  
 られ武器の操縦を習ひ乗馬の術を訓練し、君侯に對して忠  
 實を盡し誠意服従するを最上の義務と心得しむ、加ふるに



騎士武藝の  
試合

宗教的の性質を帶ぶるに至りて弱を扶け強を挫くを務め、寡婦孤兒を恤み、義を重じ、利欲を賤み、貴女を尊敬するの風を騎士一般の義務とするに至れり、是等の騎士が互に其技量を試むる方便として武藝の試合なる者熾んに行はれ群衆の面前に於て勝者が其賞を得るは騎士最上の名譽とせり、さればかの十字軍時代に奮て從軍の先導者たりしは概ね騎士にして十字軍が一たびイェルサレムを占領するや聖地の保護として三種の騎士相聯合して宗教的團隊テンブル團ヨハニター團ドイツ團を形成するに至りたり、後に是等の騎士はヨーロッパに還りて特種の軍隊を組織し、永くヨーロッパ武士の氣風を左右したり、騎士は星霜を経るに従て其威風を増長し殆ど獨立の姿を

宗教的騎士  
團

騎士跋扈し  
て王權漸次  
衰頹せり

爲して容易に王命をも奉ぜざるに至れり、爲めに王權は漸次に衰頹の傾きを現はし來りぬ、

市府の發達

この時代に發達せるは各國の市府なりとす、市府は其初め極めて微弱たる者なりしも戦争の起るに當て漸次其規模を擴張し殊に十字軍以來著しく發達したり、市府の重きを置くは商工業にして中世社會の發達と共に其需用増加し、従て市府の富源を伸張し、金を領主に獻じて自治制を得金力によりて兵を養ひ自ら衛るに力め城廓を築き以て王侯の干渉を拒むの傾きあり、十三世紀の頃イタリアのベネチア、ミラノ、ジェノバ、フィレンツ、ピサ等は殷富を極め又北ドイツに位する數十の市府がハンザ同盟を組織して市府の一致協力を圖るや交通貿易の業一に其命に出でざるは無く一

市府の跋扈



時ヨーロッパの商權全く、其手に落ちたり、現今ドイツに存するハンブルグ、リッベック、ブレーメンの三自由都府は即ち此ハ  
ンザ同盟の遺存せるものなり、

僧坊、僧派の發達

大學の起原

宗教權の勃興に伴ふて中世時代に僧坊熾んに起り、又フランスシスカン及ドミニカンの二僧派新たに起りて少壯有爲の士多く之に屬して宗教社會に勢力を得るに至り、又十字軍以來智力の發達は諸處に後世大學の淵源を生ずるに至りぬ、パリ大學(一二〇六年)立立は其最も早く起りたる者にしてオクスフォード大學之に次ぐと云ふ、

第五章 蒙古族の入寇

蒙古族は元と支那の北方に住せし微弱なる種族なりしが

興 蒙古族の勃

征 鐵木眞の西

元の太祖殂す

十三世紀の頃酋長也速該ヤスガイの時に隣邦の部落を征服してよ  
り勢稍々強大となれり、然るに中途にして殺され、種族又分  
裂したりしに其子鐵木眞テムジン長ずるに及びて英俊剛毅、遂に蒙  
古の勢を再興し、四隣諸部落を悉く征服して自ら成吉思汗チンギスハーン  
(世界大王の義)と號す、

鐵木眞世界一統の大志を起し南下して西夏を滅ぼし、金に  
寇し、朝鮮半島を蹂躪し、更に西に轉じて中央アジアに侵入  
し、當時裏海附近よりインドに跨がれる花刺子模の大領地  
を征服しチグニ、スプタイの二將をしてボロフツを南ロシア  
に征服せしむ鐵木眞西征より還り復た南方支那に入らんと  
せしに中途にして殂す、時に紀元一二二七年にして之を  
元朝の太祖と爲す、然れども太祖遠征の遺業は子孫代々之



太宗、拔都  
を遣はし  
シアを征す

拔都、ホンガ  
リアを拔涉  
してドイツ  
に入らんと  
す

を継ぎ太祖の第三子阿窩台位を継ぎて太宗と稱し金を滅し都をハラホリム(和林)に奠め兄朮赤の子拔都に命じてロシアの南部を征せしむ、時のロシア諸侯蒙古の勢を恐れ、敢て敵するの勇無く蒙古軍は到る處の市府を灰燼となし市民を殘殺しキエフも又陥る諸侯等ポーランド及びホンガリアに走りて急を告ぐるやヨーロッパの天地忽ち騒然たり、時のローマ法王グレゴリオ九世はキリスト教國民の義兵を煽動し、フランス王ルイス九世は十字軍の準備を整へ、諸國相聯合して蒙古の軍を防ぐ、然るに拔都直にホンガリアに突進して掠奪を恣まゝにしポーランドに入りて都クラカウを焚く一二四一年シレシア州のワイルスタットの原にリグニツ公ヘンリーの率るしヨーロッパの聯合軍を破り、將さ

欽察王國  
旭烈兀の西  
征

忽必烈元朝  
を建つ

に深くドイツに侵入せんとす、偶々本國に於ける太宗の計昔に接し拔都は止むなく兵を旋せり、拔都歸途ボルガ河畔一帯の地に欽察王國を建設しサライに都し、爾來蒙古族此地を領すること前後百餘年に及び、一二五八年太祖の孫旭烈兀西征してバグダード府を圍みて之を陥れアバース朝のハリフを滅ぼし更にシリアに侵入してダマスカス府を降し直に聖地エルサレムに突進す、然るに憲宗皇帝(旭烈兀)の殂するに當り遂に兵を駐め西アジアに伊兒汗國を建つ尋で世祖忽必烈位に即きて遂に支那宋朝を滅ぼし新たに都を燕京に奠め始めて國號を元と稱したり、當時蒙古の領地東西に跨がり其勢頗る大なるに乗じて口



ローマ法王  
忽必烈と和  
を結ぶ

東西の交通

ローマ法王  
の目的水泡  
に歸す

ローマ法王は忽必烈と和を結びその力を借りて回教を滅ぼさんことを圖れり、之が爲めに支那とヨーロッパとの間に使節の往復を來し従て幾多の僧侶商賈其機に投じて遙かに中央アジアを跋渉して支那に往復し始め、かのイタリヤベネチア府の商人マルコ・ポロの如きは支那に來りて元朝に奉仕すること二十餘年に及びたり、以てそが地理上並に文化の交換にいかにも莫大の便益を與へたるかを知るべし、我日本の所在がヨーロッパ人士に聞ゆるに至りたるも又實に此時に存するなり、

ローマ法王の目的は先づ蒙古の大王をキリスト教に歸依せしめ然る後回教を討つに在り、之を以てキリスト教は此時始めて支那に輸入せられたり、然れども法王の計畫其效

蒙古衰ふ

東西又遠く  
離れて交通  
絶ゆ

を奏せず蒙古の朝又衰頽し、エジプトのハリファが蒙古種民を以て組織したるマメルク兵が漸次膨脹してハリファに叛し、之を攻めてエジプトを占領し進んでシリアを侵し蒙古の軍を破りて之を滅ぼせし以來法王との交通自然に絶え、東西又遠く離るゝに至りて一たび支那に創始せられたるキリスト教も共に消滅したり、而して回教は之に反して其氣運を振興するの傾きあり、

#### 第四篇 法王權失墜して諸國王權伸張せし時代

##### 第一章 中世紀新國民の勃興

中世絶の中葉に當て東方バルカン半島附近に新國民の起れるあり、今其要領を左に摘録せん、



ロシア國民の起原

①

キエフ

モスクバ

蒙古族足跡を絶つ

イワン一世

(一) ロシア國民、ロシア民族は元とボルガ、ドニエプル兩河畔に一小部落を爲したるスラフ種族にして九世紀の中葉にノルマン種族がルーリク王朝を創設せし以來國勢漸次膨脹し、十世紀の末頃にはキエフを都として其疆域頗る増大したり、然るにルーリク王朝の一族互に各地に割據するに至り、蒙古族の侵入を防ぐの力なくキエフ陥り全ロシアの中心はモスクバ府に遷るに至りぬ、爾來モスクバ府の王侯はキプチャク國都サライに朝貢して之と和親を維持したるが十五世紀の末葉に至りては全く蒙古を排斥してその足跡を絶つを得たり、

モスクバ府をして優にロシアの牛耳を執るに至らしめたるは大公イワン一世(一三二八—一三五八)なりとす、其曾孫イワン三世

ルーリク王朝正統絶ゆ

ブルガリア民族の起原發達

セルビア民族

(一) 四五六五)に至りてキプチャクの一部を略し割據の諸侯悉く滅びて全國の統一成り東ローマの皇女ソフィアを娶りてキリスト教を奉じイワン四世の時に初めてツァーと稱し欽察カザン、アストラハン等ボルガ河下流の地を略し、其子に至りてルーリク王朝の正統絶ゆ、

(二) ブルガリア國民、ブルガリア人は七世紀の頃バルカン半島のスラフ人を征服して國を建てたり、爾來スラフ人と雜混し言語風俗從て變化し、ギリシア文化に化せられ、九世紀の頃キリスト教に歸依し、一時國勢盛なりしも幾くもなく國勢衰へ一時ギリシア帝國の羈絆を受けたりしが十三世紀の初めに再び興りて遂に獨立國となれり、

(三) セルビア國民、セルビア人はドナウ河の北岸に住せ



る蠻族なりしが七世紀の初めギリシア帝國の雇兵となりてセルビア地方に國を成すに至れり、九世紀の半ば頃よりキリスト教に歸依し、一時ギリシア帝國の衰運に乗じて入寇したることありしも果さざりき、

第二章 諸國王權の伸張

十字軍並に宗教熱勃興の結果として中世時代に跋扈を極めたる法王權、騎士の勢力、若くは市府の隆盛は中世の末葉諸國王權の伸張に伴ふて自然に衰頽に傾きたり、十三世紀の末フランス王フリップ四世王權を奮て時の法王ボニファキオ八世と寺領課税の爲に紛争を生じ法王はフリップを破門す、フリップ即ち一三〇二年貴族僧侶平民より代議士を召集

フランス王  
フリップ四  
世と法王と  
の争

アビニオン  
の法王

法王ローマ  
に還る

兩法王の對  
立

フランス、  
イギリス兩  
國に於ける  
王權の伸張

し之を諮り又宗教會議を請求しボニファキオ憤死す茲に於てフランスの高僧クレメンヌ五世を立て、法王とし居をフランスのアビニオンに移し、フランス王の命一として奉ぜざるなきに至れり、爾來アビニオンの地に法王相繼ぎて立つ事七代フランス王の威風に服する事殆ど七十年に及び一三七六年グレゴリオ十一世に至り遂にローマに還れり、グレゴリオの死後イタリア人はウルバノ六世を立てフランス人はクレメンヌ七世を立て宗門内にイタリア派とフランス派の黨争を生じ宗門の權勢是より益々衰へたり、此間に處してフランスは歴代王權の伸張に力を注ぎ、ルイス十一世(一四八三)の時に至り外交の策に長じて國內の諸侯を制御し、内政を鞏固にし、以て中央集權の基礎を完うし



ローズ戦争

たり、又イギリスは百年戦争以後國內王統の争起りヨーク家とランカスター家と互に王位を争ひ其局Yorkローズ戦争となりて久しく内亂を醸したりしが終にヨーク家の勝に歸し、王位を襲ふこと數代に及べり、然るにランカスター家のヘンリ起りてヨーク家を排して王位を奪ひ、ヨーク家の女Rosesを容れて皇后と爲し、茲に新たにナードル家の王統を開き、國內を一統したり、

ナードル家の王統立つ

ドイツの空位時代

時にドイツの神聖ローマ帝國はフレデリキ二世の死後國政紊亂甚しくドイツ、イタリア兩國恰も無政府の状態に陥れり、世に之をドイツの空位時代と稱す、既にしてハプスブルグ家のルドルフ衆に推されてドイツ帝位に登り内政の整頓に力を用ゐしより國政稍々緒に就くを得たり、然れど

ハプスブルグ家王位に登る

ゴルデンブル憲法

も諸侯多く臣服せず、カロロ四世の時にGolden Bullゴルデンブルを制定し、マイシツ、トリエル、ケルンの大僧正John His.ミア王サクツニア公ライン帝領伯ブランデンブルグの邊疆太守を七選舉公と定めて之に帝王選舉の全權を附與したり、此時John His.にシオン、フスあり教制の聖典に戻れるを論じ宗門動搖す皇帝は二四一四年諸侯、僧侶等を集めてConstanceコンスタンツに宗教大會を開きフスを異端として燒殺し三法王同時に職に在りしを悉く廢して新たに一法王を立つることを議決したり、其後フレデリキ三世の久しき治世を経てマキシミリアン一世Frederick III.に至りマインツ大僧正Berholdベルトルド等の請求を容れドイツ帝國の永久平和令を宣言し高等法院を設けて社會の安寧を維持し、又ドイツ全

コンスタンツの宗教大會

マキシミリアン一世の治世



國を十區に分ちて施政に便ならしめ、着々王權の鞏固を圖れり、

スウイスの  
獨立

是より先きドイツの附庸國たるスウイスは十二世紀の頃より漸く興りたるが山地に位するウリ、シュウツ、ウンテルワル

Switzerland  
Uri, Schwyz, Unterwalden

モルガルテ  
ン戦

デン、の三州ドイツの苛政甚しきに堪へずして同盟を結びてドイツの羈絆を脱せんことを圖り、モルガルテン(一三一

五年)センバハ(一三八六年)の二大決戦に優勢なる長槍隊(バ

レバルデ)は封建騎士の敵するところに非ずドイツ軍大敗

し、ここに獨立を完うしたり、爾來他の諸國スウイス人を僱ふ

に至り僱兵の制起り兵制上に一大變動を生ぜり、

イタリアの  
狀況

此頃イタリアに於けるドイツ帝の權勢は有名無實に歸し、國內久しく内亂の巷となりしが時運幾度も轉變して十五

イタリア五  
ヶ國に分る

世紀の中葉に至りては五王侯の分轄する所となれり、即ち

ナポリ王國、ミラノ公國、フィレンツェ共和國、ベネチア共和國及

び法王領是なり、フィレンツェのメヂシ家は、一方に文藝の復興

に力を盡し、一方には巧妙なる外交術を用ひたるが、ミラノ

公ルイス、スフォルツが、ナポリ、フィレンツェを聯合して己を圖ら

んとするを知り、フランス王カロロ八世に救を求め、ここに

イタリアの役起れり、カロロ乃ちイタリアに攻入し、ナポリ

を取る、イタリア諸市其勢力を妬み、皇帝マキシミリアン一

世、法王、イスパニア王フェルデナンド五世同盟してカロロの

兵を撤せしむ、

當時ヨーロッパ諸國は、自國權力の伸張に急なるの餘、外交術

陰險機敏を極め、就中ベネチア、フィレンツェの如きは其術最も

イタリアの  
役



巧妙なりき、所謂マキアベリズムの外交政策は、この氣運に  
乗じて出でたるなり、  
Machiavelism

法王ユリウス二世大志あり、ベネチア、イスパニア、イギリス、  
Julius II

及ドイツ皇帝と神聖同盟を結び、フランス兵をイタリアよ  
り驅逐せり、一五一五年フランス王フランシス一世憤恨に  
Francis I

堪へず、ベネチアと同盟してミラノを恢復せり、又イスパニ  
アの王孫カロロ五世がイスパニア王位を兼ねて皇帝の位  
に登るに及び、フランスは極力皇帝と雌雄を争はんとせり、

西方イスパニアに於てはカスナリ、アラゴンの二王國勃興  
Castile Aragon

して衰へつゝありしサラセンの領土グラナダは一四九二  
Granada

年遂にカスナリ、王イサベラの滅ぼす所となりぬ、後カスナ  
リ、アラゴンの二王統相合してイスパニア王國の基を爲せ

る、  
Isabella

イスパニア  
のサラセン  
王國遂に滅  
ざる

イスパニア  
ホルトガル  
兩國の起原

り、ホルトガルも又この時に獨立せり、

### 第三章 オスマンリ、トルコ族の勃興

カスピ海の東部に住せる種族をオスマンリ、トルコ族とす、  
Osmanli Turks

十三世紀の末蒙古族に追はれて小アジア地方に走り、酋長  
を略す

オスマンの命を奉じて攻戰に従事し、その子ウルカン、セル  
Osman Yulkan Seljuk

シク、トルコの勢漸く衰耗せるに乗じて難無く其領土を征  
略したり、隣邦ギリシア帝國は一二六一年ラテン帝國を滅  
ぼして恢復したるも内亂相つき國力枯衰して外敵の侵入  
を挫くの勇無く空しく敵の攻略を傍觀するに過ぎざるの  
み、之を以てニケーア、ニコメディア等のギリシア領は忽ちト  
ルコ族の占領するところとなり、ウルカンの子ムラド一世

ニケーア Nicæa  
ニコメディア Nicomedia

トルコ族の占領するところとなり、ウルカンの子ムラド一世

ムラド一世 Murad I

會長ムラド一世

會長ムラド  
一世



ムラド一世  
アドリアノ  
ーブルを陥  
る

(二三六九)がキリスト教國民の捕虜中より壯麗剛毅の士を  
選みて組織したる步兵隊優勢にしてトルコ軍の勢益々強  
く、ムラドはギリシア帝國に侵入しアドリアノーブルを陥  
る、近隣の諸市爲めに騒然たり、

バジャシッ  
ドギリシア  
を滅ぼす

ムラドの子バジャシッド勇敢父に勝りマケドニア、テッサリア等  
の地を略し尋でギリシア本國の全部を占領したり、時のド  
イツ帝シギスムンド及びフランス、ドイツの諸侯等大に之

ドイツ、フ  
ランス聯合  
軍大敗す

を憂ひ義勇兵を募りてトルコ族を撃ちたりしが一三九六  
年ニコポリスの戦に大敗してシギスムンドは海路本國に  
逃れ去りて、コンスタンチノブルのギリシア帝國も今やト  
ルコに貢賦して其歡心を迎ふるの止むを得ざるに至れり、

帖木兒の西  
侵

是より先きジャガタイ國汗に帖木兒あり中央アジアを席捲  
してサマルカンドに都を奠め、成吉思汗の轍を蹈みて西方  
遙かにロシアに侵入して大掠奪を行ひその勢頗る猖獗な  
り、バジャシッド茲に於てか之を防がんと欲し、一四〇二年大軍  
を率ゐて蒙古の兵をアショラに撃ちしも戦勝たずして潰  
え、バジャシッド幾何も無くして卒す、然るに帖木兒も亦一四〇  
五年に死し領土は久しからずして四分五裂せしかばバジャ  
シッドの孫ムラド二世(一四五二)は再び軍を興して攻戦に従  
ひコンスタンチノブルの四隣皆其威風を仰ぐに至れり、ギ  
リシア皇帝ジョアン七世はギリシア、ラテンの兩教を合併し  
て西方カトリック教の兵力を借らんことを圖りしに事成ら  
ず、ギリシア帝國の邊境日に危きに瀕せり、ムラド二世の子  
ムハメッド二世(一四五二)立て都をコンスタンチノブルに奠

バジャシッ  
ド蒙古を撃  
ちて敗らる

してサマルカンドに都を奠め、成吉思汗の轍を蹈みて西方  
遙かにロシアに侵入して大掠奪を行ひその勢頗る猖獗な  
り、バジャシッド茲に於てか之を防がんと欲し、一四〇二年大軍  
を率ゐて蒙古の兵をアショラに撃ちしも戦勝たずして潰  
え、バジャシッド幾何も無くして卒す、然るに帖木兒も亦一四〇  
五年に死し領土は久しからずして四分五裂せしかばバジャ  
シッドの孫ムラド二世(一四五二)は再び軍を興して攻戦に従  
ひコンスタンチノブルの四隣皆其威風を仰ぐに至れり、ギ  
リシア皇帝ジョアン七世はギリシア、ラテンの兩教を合併し  
て西方カトリック教の兵力を借らんことを圖りしに事成ら  
ず、ギリシア帝國の邊境日に危きに瀕せり、ムラド二世の子  
ムハメッド二世(一四五二)立て都をコンスタンチノブルに奠

ムラド二世  
大に四隣を  
略す

してサマルカンドに都を奠め、成吉思汗の轍を蹈みて西方  
遙かにロシアに侵入して大掠奪を行ひその勢頗る猖獗な  
り、バジャシッド茲に於てか之を防がんと欲し、一四〇二年大軍  
を率ゐて蒙古の兵をアショラに撃ちしも戦勝たずして潰  
え、バジャシッド幾何も無くして卒す、然るに帖木兒も亦一四〇  
五年に死し領土は久しからずして四分五裂せしかばバジャ  
シッドの孫ムラド二世(一四五二)は再び軍を興して攻戦に従  
ひコンスタンチノブルの四隣皆其威風を仰ぐに至れり、ギ  
リシア皇帝ジョアン七世はギリシア、ラテンの兩教を合併し  
て西方カトリック教の兵力を借らんことを圖りしに事成ら  
ず、ギリシア帝國の邊境日に危きに瀕せり、ムラド二世の子  
ムハメッド二世(一四五二)立て都をコンスタンチノブルに奠

ムハメッド  
二世

ムハメッド二世(一四五二)立て都をコンスタンチノブルに奠



コンスタンチノブル城  
陥る  
東ローマ帝  
國滅ぶ

めんと欲し、一四五三年大軍を以て城を圍む、城内の防禦頗る嚴なりしも遂に陥り、コンスタンチノブルの古城全くトルコの有に歸したり、東ローマ帝國茲に至て滅ぶ。トルコ族はヨーロッパに其根據を固め、ベネチアの屬領を奪ひ、ポーランドの一部を略し、クリム汗を服し、遂に一四八〇年にはイタリアのオトラントを取り、ヨーロッパ爲めに震駭す。セリム一世(一五二〇)の時にペルシアを討じ、シリア、エジプト、メソポタミア地方を併せて領土大に擴張し、來り、建國の基礎茲に確定し、爾來トルコ族はヨーロッパ列國の間に對等の勢を保つに至れり。

第四章 文運復興

トルコの基礎成る

文運は漸次進歩し來る

中世時代には文化の増進絶て見るべき者無きが如しと雖も古代ギリシア、ローマ以來の文明は敢て滅せしにはあらずして徐々として進歩し來りたるなり、只キリスト教敎權の束縛と封建制度の壓制との爲めに人心萎縮して衰退せしのみ、

文運復興の氣運

十字軍の後に至り社會の大勢一變し、人智頗る開發する所ありて法王權の衰ふると共に敎權に反抗し、煩瑣哲學の迷想を排し、文化の發揚を一時に見るに至りぬ、特に文學美術は最も其粹を極めたり、要するに古文學の研究熾んに起り、自由討究をなして新事物の發展を來せしものなるを以て世に之を文運復興と稱す、  
文運復興の先覺者として英名千古に冠たるものを神曲の



文運イタリ  
アに勃興し  
たる由來

メヂシ家の  
保護

ドイツに於  
ける文運復  
興の狀況

作者ダンテ(一二六五)なりとす、ついでペトラルカ(一三〇四)  
Dante Petrarca  
ボカナオ(一二三七五)の二詩人出で五世紀に至りてギリシア  
Boccaccio  
との交通頻繁なるに乗じてクリソロラス、ベッサリオンの如  
Chrysoloras Bessarion  
きギリシアの碩學簇々イタリアに來りて古文學を傳播し、  
加ふるにフィレンツェのメヂシ家は之が保護者として其名夙  
Florence Medici  
に高く、大學を起し、圖書館を設けて大に古文學の發達に便  
益を與へたり、

古文學の研究者を當時人道派フニニストと唱へ、ドイツに於ては古來  
Humanist  
の舊神學派との間に争を生じ互に相拮抗したりしが人道  
派よりはロイヒリン(一五二五)エラズムス(一五三七)の二名  
Leucijn Erasmus  
士出でて大學教授となり古學を以て高等教育の必須科と  
なせり、フランスにも又エスナエンヌ出でて古學を唱導せ  
Isidore

美術の進歩

建築彫刻

ミケルアン  
ジェロ

繪畫

ラファロ

音樂

古文學の新研究に伴ふて建築美術もまた復古し千古の名  
作を出せり建築にてはフィレンツェにブルネレスコ出で、ロー  
Mañuelico  
マにブラマンテの名匠出で次で絶世の大家ミケル、アンジ  
Michael Angelo  
ロ(一四七五)ローマに出でたり、彼は建築彫刻、繪畫の三術に  
秀で又詩に長ず、ローマにあるモーゼ像の彫刻竝にフィレン  
ツェのメヂシ墳塋の彫刻は實に精妙を極む、又繪畫に於ては  
Melici  
アンジロはラファエロ(一四八三)と共に二大名匠と仰がれ其  
Raphael  
他ダ、ビンナ、コレギオ等の名士皆此時代に輩出す、又音樂も  
Da Vinci Coreggio  
著しく發達し非凡の名手パレストリナは實に此時代に生  
Palestrina  
れたり、  
古文研究熱は古文の普く衆人の手に入らんことを欲し、其



活版術の發明

必要に逼られてドイツマイシツの人グーテシベルグは活版術を發明して其需要を充たすを得るに至れり、是れ文運復興の著しき結果にして後世活版術の始めなりとす、

第五章 航海發達と新陸地の發見

諸種の發明

十字軍の結果として地理上の新知識と冒険の氣風とは著しく進歩し、マルコ・ポロが一度東方諸國の無限の富を紹介してより、西人の遠征心は盛んに膨張したるに際し磁針器火藥の支那より傳來するあり又イタリヤの人フラビオ・オジッが始めて之を航海に應用し遠洋航海の危険を和ぐるに至り、<sup>Gioia</sup>に航海新發見の結果を見るに至れり、  
ヨーロッパ中部の諸國が内憂外患の爲めに國家多事なるに

西ヨーロッパ諸國航海に著目せる理由

ベネチア、ジェノバ、ピサ貿易の中心たり  
トルコの勃興は東西交通の路を杜絶す

ポルトガルのヘンリ親王大に航海を奨励す

反して比較的久しく平穩を保ちたる西部諸國が此時に當て航海事業に着目するに至りたるは抑も其故あり、十字軍以來陸路貿易によりて多大の利を得て富有を致せしベネチア、ジェノバ、ピサ等の市は東西貿易の中心たりしが、トルコ族がギリシア帝國を滅ぼして東西の關門を扼するに至りて彼我の交通忽ち沮害せられ是等の諸市漸次衰ふるに及び自ら西ヨーロッパ諸國をして他に新交通の路を發見するの必要を生ぜしめたりしなり、

時のポルトガルの皇子ヘンリ親王大に航海奨励に力を盡し、天文臺を設け、海軍學校を興し、船舶を製造し以て航海の實驗に供したり、親王の企圖は着々其效を奏し、一四二〇年頃にはヨーロッパ人未聞のマデイラ及びカナリア群島を發



喜望峯に達す

見し、ジアン二世益之を獎勵し一四八六年バルトロメオ、ディアズはアフリカの南端喜望峯に達し、東洋に通ずるの航路を確定し一四九八年にはバスコ、ダガマはアフリカを周航しインドのカリコ岬に着せり、

コロンブス

時にジノバの人コロンブスは天文地理の學に熱中し、イタリアの天文学者トスカネリの説に憑據して航路の方向を西に取て進まば以てインドに至るの捷路なるを信じ、以て各國の王侯に補助を請願したれども、容れられざりしが遂に一四九二年イスパニアの皇后イザベラの援助を得三艘の船を裝ひ有志の士を募りて同年八月イスパニアのバロス港を發して西方に向ひしが太西洋を航する八十六日にして十月始めてサン、サルバドル島に到着するやコロンブ

一四九二年西インドに達す

コロンブス、イスパニアに歸着す

カボットの發見

スは之を以て東インドの一部なりと信じ、之に次ぎてキューバ、ハイチ等の諸島を發見したれどもポロの東洋紀行に記したるが如き金銀珠玉は得て求む可らず、然れどもコロンブスはインド交通の業を完うせりと信じ、キューバ島に城壁を築き殖民地を設けてイスパニアに歸着したり、其後コロンブスは新陸地に航すること三回、ジャマイカ島、アンタル群島、カリブ群島を發見し、オリノコ河口に於て大陸に觸れたり、是等の新領土今や悉くイスパニアに屬するに至れり、一四九七年イギリス人ジョン、カボット、インドへの北路を發見せんと企て北アメリカのブレトン岬に觸れ沿岸を南下する數百哩に及びて新大陸の所在愈々確然たり、此頃イタリア人アメリゴ、ヴェスプッチ西ヨーロッパ諸國に雇はれて南ア



アメリカの  
名稱

アメリカの沿岸を搜索すること數回、一五〇四年彼が精細な  
る紀行を世に公にするや其名に因りて新陸地をアメリカ  
と總稱したり、新陸地の發見は只に物質上のみならずポ  
ランド人コペルニクスは地動説を唱導してバイブルの創  
世説に一大打撃を與へ宗教界の一大變動を起せり、

第三部 近古史(紀元一五一七年より一八

一五年に至る)

第一篇 宗教改革及び殖民競争の時代

第一章 宗教改革

宗教改革の  
先鞭

十字軍以後教界の腐敗墮落を極むるに當り、十四世紀には  
天災地變並び至り、人心皆眞信を求むるに急なるものあり、  
且つ人智の進歩は舊來の教理儀式に満足せずして改革を  
希望するの風到る處に鬱勃たりしが、遂にイギリスにシ  
ン、ウイクリフ起て改革を唱へ一時勢を逞ふし又ボヘミア州  
にフオエ黨ありイタリアにサボナローラ起りて人心を刺激し  
たりしも、時運の未だ到らざりし爲め孰れも其業を完うせ



宗教改革の  
原動力

ずして終りき、然るに中世の末期に起れる文運復興と航海の發達とは遂に宗教社會の腐敗を黙する能はざるに至らしめたり、

マルチン  
ルター

宗教改革は其端緒をドイツに開く、ウイテンベルヒ大學の神學教授マルチン、ルーテル實に改革運動の主唱者たり、偶々

Martin Luther

Wittenberg

時の法王レオ十世はセント、ピーター寺院建築を名として

Leo X.

諸國に免罪符の販賣を施行するに及びルーテル之を見て

慨然禁ずる事能はず、一五一七年直に九十五ヶ條の意見を

ルター九  
十五ヶ條の  
意見を公示  
す

草してウイテンベルヒの寺門ルターに公示し、以て免罪符販賣の不

Wittenberg

正なるを駁撃し聖書以外にキリスト教なしといひ、法王に

も過失ありと斷言したり、茲に於てか宗教社會忽ち騷然た

りレオ十世此變を聞き屢々使者をルーテルの許に遣はし

て私かに之を鎮制せん事を圖りしが一五一九年ローマ教

の僧John Eck、エックなる者ライプツヒ府に於て公然ルーテル

John Eck

Leipzig

の説を攻撃したりしかばルーテルは茲に意を決してロー

ジョアン、エ  
ック、ルーテ  
ルを駁す

マ教會の弊害を論破し改革の愈々急なるを叫びたり、之が

Thomas

爲めに翌年法王より破門の嚴命を受けたれども恬として

懼るゝの色なく悠然として破門の令狀を火中に投じたり、

ルーテル破  
門の令狀を  
焼く

此時碩學メランヒトン及び騎士ジッキンゲン、フッテン等の諸

Melancthon

Sickingen

Huten

士は皆赤心を捧げてルーテルを輔翼せんことを誓へり、

偶々ドイツ皇帝マキシミリアン一世殂して其孫イスパニ

Maximilian I.

ア王カローロ一世入りて皇位を繼ぎて五世と稱し、ローマ法

Charles I.

王の請を容れて一五二二年ウルムス府に國會を開きルー

Worms

テルを召喚して其意見を棄却せんことを勧めたりしにル

ウルムス國  
會



サクソニア  
公ルーテル  
をワルトブ  
ルグ城内に  
迎ふ

諸暴動改革  
に關して起  
る

ルーテル諸  
暴動を鎮定  
す

ルーテル斷乎として動く所無かりしかば遂に皇帝より異端  
として國外追放の宣告を受けたり、サクソニア公フレデリ  
キ其心情を憫み途潜かにルーテルを擁してワルトブルグ  
城内に迎へ之を保護したり、ルーテル茲に留まること一年  
救々として聖典の翻譯に従事したり、ルーテルがワルトブ  
ルグ城に隱遁せるの隙に當りてジッキンゲン等の騎士は諸  
侯を抑制せんと圖りて暴動を起し、ルーテルの友なるカー  
ルスタットはウイテンベルヒに於て改革の事業を武力に訴へ  
んことを企て同時に南ドイツの農民等は自由の權を得ん  
ことを名として一揆を起し三者共にルーテルの宗教改革  
を利用せんとしたれどもルーテルは百方之が鎮定に力を  
盡したり、

ドイツの二  
大外患

トルコ、オ  
ーストリア  
を侵す

フランス王  
フランシ  
ス、カロロ  
とイタリア  
に戦ひ敗ら  
る

當時ドイツ國內に二重の外患あり、一はフランス王フラン  
シス一世ドイツ帝位の争よりカロロ五世に敵意を表し、一  
は東方トルコ族がドイツ方面を侵さんとする是なり、トル  
コ族は曩にギリシア帝國を滅ぼせしより勢に乗じてスリ  
マン二世はフランシスと結びてホンガリアに攻め入り一  
五二六年之を占領して將さにオーストリアに進まんとす、  
時のオーストリア帝フェルディナンドはカロロ五世の弟なる  
を以てカロロはイギリス王と同盟し僅かに之を破りて和  
を講ぜり、然るに一方にはフランス王フランシスは王權伸  
張領土擴張の大志を懷きてカロロとイタリアのミラノを  
争ふて交戦し、一五二五年フランシス敗れ虜となる、然に法  
王クレメンヌス七世はカロロに服せずフランシスと更に同



スバイエルの國會

カロロ新教の擴張を禁ず

アウグスブルグの國會

シマルカルデン同盟

盟を結びてカロロに抗せしかばカロロはイタリアを陥れ一五二九年和す、カロロはまた宗教改革の運動を利用せんと欲し、一五二六年スバイエルに國會を開きて暗に改革黨の教理を許容したるが既にして其勢の盛なるを畏れ一五二九年再びスバイエルに國會を催ふして新教の擴張を禁じたり、此時新教黨は大に其議に抵抗したるの故を以て爾來プロテスタント(反抗者)の名稱を得るに至れり、尋て翌年アウグスブルグの國會に新教派の諸侯も多く列席し、新教黨は此時メラントンの草せるアウグスブルグ信條Confession of Augsburgなる者を皇帝に捧呈せしかども容れられず、却て國會は新教の成立を否決せしかば新教派は茲にシマルカルデン同盟を組織し以て新教を保護せんことを決したり、

第二章 新教の成立と諸國に於ける宗教改革の狀況

革の狀況

カロロ五世はイタリアの役にフランシスを屈服して國難のCharles Francis一を除くを得たれどもフランシスは常に隙を伺ひ又法王及舊教徒のドイツ諸侯は帝權の増大を恐れて抗せんとし加ふるに東方トルコ族は頻りに帝國の領内を侵さんとするを以て内外多端に苦しみ一五三二年ニールンベルヒにNürnberg宗教會議を開きて一時新教の成立を認可したり、この頃新教は既に到る處に贊同せられ、北ドイツ諸州概ね新教を奉せざる無きに至れり、然るに皇帝カロロはこの間にスリマンを撃退しフランシスを屈せしめ一時紛争の局を告げし

ニールンベルヒの宗教會議



トリエントの宗教大會

を以て一五四五年トリエントに宗教大會を催ふして新舊  
 兩教徒を召集したり、新教徒は其法王の意に出るを知りて  
 皇帝の命に應ぜざりしかば皇帝は兵力に訴へて新教徒の  
 列席を迫り、シッマルカルデン同盟の領袖サクソニア公フ  
 レドリキ並にヘッス公フィリップの二人に帝國禁令を命じたり、茲  
 に於てか新教徒は斷然武器を執て皇帝に逆ふに至れり、是  
 れシッマルカルデン戦争の發端なり、ルーテルは此事變の起  
 るに先ちアイスレーメンの故郷に病死したり、戦争の始ま  
 るやサクソニア公の甥なるモリスは公に對して不和なる  
 に乘じ新教を奉ずるにも拘らずカロロに内應せしかば新  
 教軍は大に敗れサクソニア公は虜となり悉く其領地を没  
 收せらる、既にしてモリスは帝權の過大を恐れて又忽ち一

シッマルカルデン戦争  
ルーテル死す

モリス叛して新教軍大に敗る

モリス急にカロロを襲ふ

アウグスブルグの宗教平和大會  
改革運動全く成效す

スイスの宗教改革

變して新教軍に歸順し、フランス王ヘンリ二世(フランス)  
 と同盟して急にカロロを襲ひしがばカロロは不測の計に  
 陥り應急の備へ無く漸く身を脱してイタリアに逃れ、一五  
 五二年パッサウに和を媾じ、新教の自由を許し、サクソニア公  
 の放釋を約したり、一五五五年アウグスブルグの宗教平和  
 大會に於てパッサウの條約愈々確定せられ、爾來新舊兩教共  
 に同權を維持するを得るに至り、ルーテルの改革唱導よりこゝに  
 至て全く其效を奏したり、ルーテルの改革唱導よりこゝに  
 三十八年なり、  
 ドイツの宗教改革は忽ち其餘波をヨーロッパ各國に傳へた  
 り、今主なる諸國の改革狀況を略記せん、  
 (一) スイス、此國に於ける新教の創立者をウルリヒ、ツウ  
 (Ulrich Zwingli) Switzerland



ツウイングリ

ングリなりとす、彼は深く經典を究めルーテルと恰も同時代に法王の免罪符販賣を難じ以て身を宗教改革に委ねたり、當時スウイスは七州カントンより成りしがツウイングリの力に因りてチューリヒ先づ舊教を脱し、尋でベルン及びバゼルの二州Zurich Kerne Basel 之に倣へり、然るに他の四州は依然として舊教を奉じ互に同盟して新教徒に對抗し遂に兩者の間に戦端を開きたりしが新教軍大敗してツウイングリ戦没し、爲めに新教は一時其勢沮喪したれども全く消滅するに至らざりき、

(二)イギリス、當時のイギリス王ヘンリ八世Henry VIII (一五〇九)は舊教を保護し自ら筆を執りてルーテルを攻撃せしことありしも皇后カタリナ(カロー五世の叔母)を離婚せんと欲し法王の認可を請ふや法王は其離婚を不當として王を破問したり、從

イギリスの宗教改革

ヘンリ八世

エドワルド六世

マリア女王

來國民は法王の課税を不快とせしを以てイギリス國會は茲に於てイギリスと法王との關係を絶ち教會をして全然王の配下に屬せしめたり、此機に乗じて新教は漸次其根據をイギリスに固めたれどもヘンリ八世は依然舊教を信奉して新教を酷遇したりしが其子エドワルド六世の時に至りて大僧正クランマーCranmerの説に従て稍々新教に傾き、アングリカン教會の組織全く此時に成れり、一五五三年女王マリアMaryは舊教國なるイスパニアのフィロポ二世と婚して舊教を復興して新教徒を虐待しフランスと戦ひて最後の領土カレールを失ひ大に人心を損せり、マリア殂してエリザベタ女王Elizabeth位に即きて新教の再興を圖り、イギリス新教の基礎茲に全く動かざるに至りぬ、



スコットランドの状況

又スコットランドに於てはジョン・ノックス大陸より新教思想を齎らし來りしより漸く朝野に傳播し始めたり、

フランスの状況

(三) フランス、此國の新教はジョン・カルビンの力に因りて漸次に廣まり、其宗派を特にユグノーと稱す、然れども當時フランスは舊教を固執して新教を排斥せしかばカルビンを始め其宗徒は難を國外に避け、カルビンはジュネーブ市に逃れたり、

ジョン・カルビン

Huguenots

John Calvin

に逃れたり、ジュネーブ府民はスイスのベルン府より援助

カルビンの教義

Switzerland

Berne

Geneva

を借り舊教を脱して新教を奉ずるに至りぬ、カルビンの教義は新教中最も進歩したる者にして後にカルビン教と稱する一宗派となれり、

ヨーロッパ北部の状況

(四) 當時ヨーロッパ北部のノルウェー、スウェーデン、デンマークの三國は共に一王の下に司配せられたりしが政治上の革命

Norway

Sweden

Denmark

起りてグスタフ・バサ王位に登るに至りて大に新教を保護したり、爲めに新教の傳播頗る速かなりき、

Gustavus Vasa

ゼスイ特派の創始

(五) 新教の發達と共に二派互に争ふに至り且つ理論に走りて宗教に必要な儀式を無視したるを以て却て舊教の反動的改革を惹起し、

ロヨラ

Ignatius Loyola

イスパニアに於てはイグナチオ・ロヨラは一五四〇年にゼスイ特派(即ち天主)を創始し嚴肅なる教育を施し宗教者を養成して舊教の基礎を確立し、ゼスイ

Jesuit

ト教團を組織して大に法王の威嚴を伸張するを務め、遠隔の異邦に熱心なる布教を試み其勢自ら新教に拮抗するに至れり、



### 第三章 ポルトガル、イスパニア兩國の殖民政策

バスコ、ダ、  
ガマ、イン  
ド貿易の途  
を開く  
アルブケル  
ケ、インド殖  
民の根據を  
設く

新陸地の發見は其卒先をなしたるポルトガル、イスパニア二國をして益々異域の殖民に注目せしめ従て兩國の富強を來たせり、一四九八年ポルトガル人バスコ、ダ、ガマがインド貿易の途を開てより從來インド貨物は陸路貿易によりてサラセン人とベネチア人等との間に行はれしもの一變しベネチア人等の商業はポルトガル人の手に落つるに至れり、其初め番に交易を目的としたりしが英邁なるアルメイダ及びアルブケルケがインド貿易を總轄するに至りて土着の諸侯より領地を押收し以て殖民の根據を設けたり、

Almeida

Albuquerque

Vasco

Da Gama

ベネチア人  
ボ人排斥を  
企て、成ら  
ず  
ゴア府を占  
領す

オルミッツ  
府を陥る

ポルトガ  
ル、支那、日  
本に交通を  
開く

ベネチア人は商權の次第にポルトガル人の手に移るを嫉み、アラビア人を誘ふてポルトガル人排斥の策を講じたれどもアルブケルケの炯眼能く其謀を洞察して水泡に歸せしめたり、一五二〇年ゴア府を占領してインド總督廳を此地に置きポルトガル國の殖民愈々鞏固となれり、尋てマラカ半島を占領し、又ペルシア灣口のオルミッツ府を陥る、當時オルミッツ府はインド、アフリカ、アラビア、及び中央アジアの海陸交通の中心にして市街の繁昌富裕他に其類尠かりき、ポルトガル人はインドの殖民に満足せず更に東方に進みて支那沿岸を侵し、遂に支那帝國と交渉して一五一七年廣東河口に媽港マカオ（本邦人、天）の港を永代借用して支那貿易を始め、一五四二年（天文十）同國人ピントなる者我種子島に漂着

Goa

Malacca

Oreniz

Macao

Pinto



リスボン府の隆盛  
イスパニアの殖民政策

マガリアエ  
ンスの世界一週

南アメリカの征服

して銃器を傳へ、始めて我國と交通を開き、本國の首府リスボン港は隆盛を極め世界貿易の中心となれり、  
 リスボン  
 イスパニアはコロンブスの發見以來頻りに新陸地に航海を試み、一五一三年バルボアは遙かにパナマの地峽に達し、  
 Balboa Panama  
 一五二〇年ポルトガルの船師マガリアエンスはイスパニア王の命を奉じて南アメリカの南端マガリアエンス海峽を廻りて太平洋に出で、之を横ぎりて遠くフィリピン群島に達し、土人の爲めに殺されしが其徒更に西方に航して一五二二年イスパニアに歸航したり、是を世界一週の始めとす、尋でヘルナンド、コルテスはメキシコ遠征を完うしてイスパニア領と爲し、フランシスコ、ピサロは南アメリカ、ペルーを征服したり、  
 Hernando Cortez Mexico  
 Francisco Pizarro Peru

キリスト教の東洋布教

フランシス、ザビエル  
日本に布教す

マテオ、リッチ  
支那に布教す

兩國の殖民政策はキリスト教の布教を伴ひ、當時新教に拮抗して起りたるゼスイト教は頻りに東洋に向て其の勢力を伸ばせり、さればインドのゴア府は啻に殖民政廳の所在地たるに止まらずして實に東洋に於けるキリスト教の根據地たり、高僧フランシス、ザビエルは久しくゴア府にキリスト教の管長を奉じ、一五四九年(天文十)我國に渡來して西教を傳へ、當時の我が民心に適遇して一時熾んに擴まれり、  
 Francis Xavier Goa  
 又同じくゼスイト派のマテオ、リッチ(利瑪竇)支那に布教し、北京に會堂を設けしよりキリスト教は漸く支那に傳播し始めたり、

此の如く兩國が殖民を擴張するに及び、相互の間に争を生ぜしを以て、法王は令して兩國殖民地の境界を定め、カボ、ベ



ルデ島の西に子午線を設けて、東をポルトガル領とし、西をイスパニア領とせり、斯の如く兩國は遠征殖民に長じたれども其政策を誤りしが爲めに、久からずしてイギリス、フランスの爲めに勢力を奪はるゝに至れり、

第四章 オランダの獨立とイスパニアの衰運

皇帝カロロ五世は失意の餘、位を弟フェルデナンドに譲り子フリポ二世にイスパニア王位を授けて僧院に退き幾くもなくして死したるがフリポ二世の時其領土は本國以外に繁盛なるネーデルラント、ナポリ、シチリアの兩王國、ミラノ公國、富源なる北アメリカの殖民地及び東方フィリピン群島を含有し其富強他に類なくイギリス女王マリアと婚して

イスパニア  
王フリポ  
二世

Philip II.

Neth. land

Naple Sicily

Milan

America

Philippine

屬領自ら本  
國に叛くに  
至る

ネーデルラ  
ント

ネーデルラ  
ント國民漸  
くフリポ  
二世に背く

マルガレタ  
攝政となる

フランスと戦ひ又レパントの海戦にトルコ軍を敗り又ポルトガルの王位を兼ねたりしが君主專制を固執し新教を壓迫し屬領の風俗習慣を無視して壓制を加へたるを以て遂にオランダの獨立となりて衰運に向へり、

ネーデルラントは土地概ね不毛なりと雖も人民伶俐にして商工業頗る熾んに富有を以て稱せらる、宗教改革の起る

Netherland

や率先して新教を賛し後ちカルビン教を奉じ國民の元氣盛なりき、

フリポ二世は當時此國の名族にして英名の聞えあるエグ

Egmont

モント伯及びオランジ、公ウィルレムの二人を擱きて異母妹

Orange

William

マルガレタをネーデルラントの攝政に任じ、舊教の僧正グランベリ、を其顧問に任じイスパニア軍隊を國內に駐屯せ

Granvela



ネーデルラ  
ンド國民遂  
に反す

しめ、又舊教の僧侶を増加して附するに寺領を以てし務め  
て新教を壓抑せしかば國民茲に蜂起して畫像破毀の亂を  
始めたり、フリポ即ちアルバ公を派遣して兵力によりて軍  
法會議を開きエグモント伯等<sup>Alba</sup>を糾問して死刑に處し、其他  
新教徒の刑に處せらるゝ者多かりしかば國民遂にオラン  
ジッ公<sup>Orange</sup>ウィルレム<sup>William</sup>を推して首領と爲して獨立を計れり、茲に於  
てフリポ屢々兵を出して之を鎮定せんことを圖りたれど  
も遂に果さず、一五七九年ホルランド、ゼーランド、ユトレヒ  
ト、ヘルデルランド、グロニンゲン、フリースランド、オベリッセル  
Gelderland Groningen Friesland Overijssel  
の七州はユトレヒト同盟<sup>Drecht</sup>を結びてイスパニアの羈絆を  
脱し、オランダ聯合共和國を組織してオランジッ公ウィルレム  
を世襲の總督に仰げり、オランダ共和國の端緒茲に存す、

ユトレヒト  
同盟  
オランダ共  
和國成る

エリザベタ  
女王とマリ  
ア女王

舊教徒イギ  
リス王を廢  
せんとして  
成らず

イスパニア  
王アルマダ  
艦隊を發し  
てイギリス  
を征す

當時イギリスは英邁なる女王エリザベタの朝にして新教  
を信奉しアングリカン教會を確立して宗教の紛擾を統一  
し國運漸く發揚の域に向ひたれども北方スコットランドに  
女王マリア位<sup>Mary</sup>に在り、性淫逸イギリスの王位をエリザベタ  
と争ひ敗れたるが舊教徒はエリザベタを廢してマリアを  
立てんことを圖れり、然るに其謀露はれて成らず後マリア  
國人に逐はれてエリザベタに投せしがエリザベタは之を  
幽すること十八年の後遂に死刑に處せり、茲に於てエリザ  
ベタは國內の舊教徒を遇する一層峻嚴を以てし、折しもネ  
ーデルランドの叛せるに際して兵を出して之を援け又西  
インドを侵せり、茲に於てフリポ二世<sup>Philip II</sup>は一五八八年百餘隻  
の戰艦<sup>Armada</sup>(アルマダ艦)を發してイギリスを征す、然るにイギリ



イスパニア  
衰ふ

スは恰も海事思想勃興の時にしてホーキン、ラレー、ドレー  
キ等の名將風雨の起るに乗じて巧みに戰艦を運轉し以て  
イスパニア艦隊に衝りしかばイスパニア軍悉く敗れ過半  
沈没して漸く本國に逃げ歸れり茲に於て從來イスパニア  
が專有したる海上權は此時よりイギリスの手に移り、イス  
パニアの國勢大に衰ふるに至りぬ。

第五章 フランスの宗教内亂と王權の發達

新教漸次フ  
ランスに蔓  
衍す

カルビン教はフランスの上流社會に其根據を固めて國內  
に傳播し、フランシス一世、ヘンリ二世は政略上ドイツにて  
は新教を助けたるも國內にては舊教を守り頻りに新教を  
虐待せしと雖も新教は漸次蔓衍の兆を現はせり、フランシ

新舊兩教徒  
の軋轢

ユグノーの  
亂

ス二世カロロ九世相次で立ちしも(ヘンリ二世)幼冲なりしを  
以て其母カタリナ政を攝し舊教を信ずるギーズ侯の專横  
を抑へんとし幾分の自由をカルビン教に與へたるを以て  
舊教徒大に激昂したり一五六〇年新教徒はギーズ侯の勢  
力を殺がんことを企てしに事成らず新教徒爲めに此時多  
く罪せらる茲に於て新教徒はドイツ、イギリス兩國新教徒  
及びコンデ公の援助を得、舊教徒はギーズ侯を推し法王、イ  
スパニア王フリップ二世の援を借り紛争數年に亘れり之を  
ユグノーの亂といふ、  
カロロ九世はイスパニアの干涉を恐れ新教徒を助けて之  
を却けんと欲し新教の首領コリニを宰相とし妹女マル  
ガレタを王室の支流にして新教の貴族なるナバラ公ヘン



聖バルトロ  
メオの大虐  
殺

偽教徒の暴  
行は大に列  
國新教國民  
の感情を害  
す  
ヘンリ三世

りに娶はすことを定め、パリ府に盛大なる式典を擧げんとす。カタリナはコリニーを悪みギーズ侯と謀り之を倒さんとす。新教徒之を知りて復讐せんとするの勢あるによりて王に迫りて新教徒鑿殺の勅許を得て同年八月二十四日、聖バルトロメオの夜を期して新教徒の大虐殺を行ひ爲めにコリニー以下數千の新教徒は一夜の中に屍をパリ府に曝せり。同時に地方に於ても新教徒の虐殺せられたる者其幾千なるを知らず、此事たる大に新教國民の感情を害しフランスの宗教内亂は敢て鎮滅するに至らざりき。

ヘンリ三世(フランスの弟)位に登りて新教徒を寛容しギーズ侯を殺してイスマニア王の野心を挫きたるも王は國家經綸の才に乏しくして新舊兩教徒共に王を信用せず、王又定

ナバラ公ヘ  
ンリ、ブル  
ボン朝を開  
く  
ヘンリ四世  
フランスの  
國勢を復興  
す

見なく新教に與みするが如くにして動もすれば舊教同盟に加はり、遂に非命に斃れ、一時王位の争起りしが、ナバラ公ヘンリ遂に勝を制してブルボン朝の祖となりヘンリ四世と號したり、當時フランスは内憂外患の久しく續きしが爲めに國政紊亂し國民窮迫に苦む、ヘンリ四世即ち意を茲に用ひ外患を退けて國境の防備を完うし舊教を奉じてその徒を和げ一五九八年ナントの勅令を發して新舊兩教の布教を許し以て國內の紛擾を解き専ら力を國力復興に用ゐしかば社會の狀況日に月に革まり、幾何もなくして國勢舊に復し、フランスの王權は之より益々確立の氣運に向ふに至りぬ。



第六章 三十年戦争

ドイツの宗教紛擾は一五五五年の平和條約に因りて靜謐に歸し、皇帝フェルディナンド一世及びマキシミリアン二世相繼ぎて平和の策を講じたるを以て新舊兩教の間暫らく無事なりしに、ルドルフ二世位に即きて舊教に左袒し、ボヘミアの新教徒を抑壓せしを以て兩教不和の端緒又新たに茲に胚胎し、新教徒は保護同盟を組織し以て舊教徒に抗するに至れり、此機に乗じ列隣の強國フランス、デンマーク、スウェーデン等は互にドイツの内情を窺はんことを企てたり、そも是れ三十年の久しきに亙りし宗教戦争の發端なりとす、一六一八年ボヘミア州の新教徒叛して皇帝フェルディナンド

ルドルフ帝  
舊教に左袒  
して兩教の  
争又新たに  
生ず  
三十年戦争  
の原因  
ボヘミアの  
叛

二世に抗し、フルツ公フレデリキ五世(イギリス王ジョージ一世の婿)を戴きてボヘミア王兼新教同盟の首領とす、皇帝フェルディナンド即ち兵を發して直に之を討ず、新教軍大に敗れ、ボヘミア州の人民此時過半其命を失せしと云ふ、新教軍の首領フレデリキは捕へられて其領地を沒收せらる、然るにイギリス、オランダ、デンマークの諸國は是を見て大にフレデリキに同情を表し、デンマーク王クリスチアン四世はイギリス、オランダの援助を得て兵を出して、フレデリキを救はんことを圖りたれども、ドイツ軍の名將ワレンスタイン及びナリの破る所となり、一六二九年故國に追はれて和議を結べり、皇帝勝に乗じて舊教復興の勅令を發して益々國內の新教を壓制したり、此の時に當りスウェーデン王グスタフ、アドルフ

クリスチア  
ン四世新教  
徒を救はん  
として敗る  
ワレンスタ  
イン

Gustavus, Adolphus



スウェーデン王立てドイツ軍を破る

リッペンンの役

新教軍の大勝

ルイス十三世

リッペンンの宰相となり兵を出してドイツの新教軍を援く

は當時國力増長を計りバルト海上の覇權を握らんと欲し、新教を救ふを名として兵を起しイギリス、オランダ二國の後援を得、フランスの宰相リッペンンより軍資を出してドイツに侵入し到る處にドイツ軍を破り進んで南方に攻め入り一六三二年リッペンンの野にウレンスタインの軍を悉く破れり、此戰たるスウェーデン王自ら斃れたりと雖も新教軍の大勝之を以て始めとす、

此より先きフランス王ヘンリ四世はドイツを侵すの志ありしも果さずして殞し其子ルイス十三世幼にして母后マリア政を攝して一時國政を紊亂したれども大僧正リッペンン不世出の才を懷きてフランスの大宰相となるに及びて國是一定し故ヘンリ王の素志を受けて兵をドイツに出し

Henry IV.

Louis XIII.

Richelieu

以て新教軍を援けたり、一六三四年ウレンスタイン叛逆の疑を得て陣中に殺されしよりドイツ軍の勢大に沮喪し加ふるに從來ドイツ軍に加祖したるイスパニアが内憂外患に苦しみて援兵を派遣する能はざるに至り、皇帝は前途の勝算覺束なきを察して遂に休戰を約し、一六四八年に至りてウエストフリアの和議を締結したり、

Wallenstein

ウエストフリアの條約

三十年戦争の結果

此條約に依りて新舊兩教は同權を有するに至り、オランダ及びスウイスは各其獨立を承認せられ、フランスはツール、ルサス等の地を得、スウェーデンはポメラニアの一部を得、ドイツ國會に出席するの權を得たり、獨りドイツは戰後國內の諸侯割據の狀を呈して帝國殆ど瓦解し、國力日に疲弊して朝野の事業全く振はざるに至れり、



第二篇 フランス強盛時代  
第一章 フランスの強大

リシ、リッ、  
フランス強  
大の基を開

マザレンの  
事業

フランスの大宰相リシ、リッは國內の中央集權を確立して  
對外政策に全力を注ぐの方針を執り、宗教内亂を蔑視し、貴  
族の跋扈を制して王權を擴張し海陸の軍備を整ふる等在  
職十八年の間孜孜として其實行を務めしかばフランス強  
大の基礎竝に成れり、リシ、リッ死して大僧正マザレン其遺  
業を継ぎウエストフ、リアの條約によりて領域を増大し、イス  
パニアの内亂に干渉して一六五九年ピレネー條約により  
ネーデルラント領の一部を得、イスパニア王の長女マリア、  
Netherland  
Louis XIV.  
テレンサを當時の王ルイス十四世に嫁せしめたり、

フランスの  
王位継承  
の事  
を  
論ず  
る  
事  
あり

ルイス十四  
世

フランスの  
状況

フランス文  
學の隆盛

ルイス十四世英邁豪放長じて政を親らし君主專制の策を  
畫し、フランスの文學、技術、風俗、習慣をしてヨーロッパ諸國の  
模範たらしめ以てフランスの隆盛を驕らんことを務めた  
り、故を以て當時ベルサイユの宮殿壯麗華美を極め宮中の  
儀禮完備したるは素より言を俟たず、貴賤尊卑の等級自ら  
分れて社會の秩序能く整ひ、國會の如きは單に王命を奉ず  
るに過ぎざるに至れり、王權の發揚此時の如きは未だ曾て  
見ざる所なり、さればフランス宮廷の制度は自然に列國君  
王の模倣する所となり、之に伴ふてフランスの文物習慣は  
普くヨーロッパ社會に好迎せらるゝに至り、ルイス十四世の  
希望愈々其實を擧げたり、かの文壇の名士たるユルネイユ、  
Racine, Moliere, LaFontaine, Corneille



ルイス十四世  
世を擧げて  
財務を委ぬ

國庫増加

ルイス十四世  
の外征

黄金時代を作為するに至りたるも實に此時に存す、ルイス十四世は常に表面の華美を驕るを務めたるのみならず財政の才に長ぜるコルベールC Colbertを擧げて國家の財務を一任したり、コルベール大命を奉じて經營二十年、租税を改良し外國の輸入品を防ぎて國內の商工業を振興し以て國民一般の富源を養はしめ、又海外貿易を奨励して遠くインド、アフリカ諸國へ交易の端緒を開かしたり、之を以て上下の經濟其宜しきを得て自ら餘裕あるに至り國庫の増加は王をして着々自國隆盛の策を實行するの效あらしめたり、

ルイス十四世  
オランダを征す

ナイメーヘンの條約

カロロ二世立つに當り自ら女婿たるの故を以て領土の割讓を請求し其容れられざるを名として兵をイスパニア領ネーデルラントに出したり、然るにイギリス、オランダ、スウェーデンの三國同盟に妨げられて果さず一六六八年アッヘンAachenに和を媾し數市を得て兵を本國に旋したり、茲に於てかルイス十四世は大にオランダの處置を怨み、先づ三國同盟を解散するの策を講じ、一六七二年自らコンデ、チレンヌ等の名將を隨へてオランダを征す、オランダのオレンジ、公ウィルレム三世は陸軍を率ゐるデ、ロイテル將軍は海軍を指揮して風雨に乗じて奮戦したれども大に敗れ、ドイツ、ブランデンブルグの選舉公起ちてオランダの急を救ひたれども又果さず一六七八年オランダは遂にナイメーヘンに和議を



ルイス十四世ドイツに出兵す

締結し侵地を返しイスパニアよりフランス、シ、ユンテ及ネーデルラントの要地を奪へり、此勢に乗じてルイス十四世は進んでドイツに干渉し、當時諸侯割據の爲め國力疲弊せるを機としフルツの相續權を主張して之を略せんとしたればイギリス、オランダ、イスパニアの三國は全ヨーロッパを合従して以てルイス十四世に衝り、海陸互に勝敗ありしが遂にライスウィックの條約を結びルイスはストラスブルグの要地を併したり、此の如くフランスは内治外交共に着々として其效を奏せしかば當時その隆盛他に比類を見ざるに至り、列國皆其盛況を傍觀するの有様なりき、

第二章 オランダの隆盛及び東洋殖民

オランダの國是

イスパニア大にオランダを妨ぐ  
オランダ、インド交通の策を講ず

イスパニア、ポルトガルに次ぎて東洋殖民に着手したるはオランダ及びイギリス、フランスの三國にして就中オランダは最も其初めに成效したり、オランダは元と航海貿易を以て國を維持し當時世界貿易の中心たるリスボン府に往復してヨーロッパ各地に貨物の分配を司とり以て商利を博したり、然るに其一たび叛してイスパニアの羈絆を脱して獨立するや大にその憎む所となれり、偶々ポルトガルが血統上の關係よりイスパニアに併せらるゝの事起りイスパニアはオランダに復讐せんと欲し直にオランダ船のリスボン入港を禁じ大にその貿易に妨害を與へたり、オランダは事國家の消長に關するを以て茲に直接インド交通の路を開かんことを決し、一五九五年リスボン及ヒョウ



リンスコ  
ラン、ホウ  
トマン二艦  
隊オランダ  
を出發す  
ジャバ島に  
バタビア政  
廳を設く

オランダ、東  
インド商會  
の設立

オランダ船  
我國に漂着  
す

トマンの二艦隊オランダを出發して南北兩路に分れて進  
みたりしが北路を取りたるリンスコランはノバゼンブ  
ラ島を發見して本國に歸り、南路に進みたるホウトマンは  
アフリカを廻りてインドに至り、一六一七年ジャバ島に達し  
イギリス、ポルトガル兩國民の妨害を排斥して難なく此島  
にバタビア政廳を創設しモルッカ島を占領し一六四〇には  
マラッカを取りセイロン島よりポルトガル人を逐ひ一六五  
〇年にはアフリカ南端に殖民せり、  
是れよりさき一六〇二年東インド商會と號する一大會社  
の組織成り政府の保護を受けて屢々艦隊を東インドに派  
遣したり、此中マヘー艦隊の一隻は慶長五年(關ヶ原の役)我國  
に漂着し、折しも德川幕府創業の際に當り水師提督ウイリ

オランダ我  
國の外國貿  
易權を掌握  
す

オランダ臺  
灣を占領す

臺灣島再び  
支那に歸す

アム、アダムスは幕府に召されて大に厚遇せられ通商の許  
可を得たり、德川幕府三百年の鎖國時代に我國と外國との  
交通貿易を司とりたるは獨りオランダ人あるのみにして  
其我國の開國に裨益せし所尠からず、  
オランダ人は又支那貿易の特權を得んと欲しポルトガル  
の殖民地なる媽港の湊を屢々襲ひたれども果さず、遂に支  
那帝國に迫りて一六二四年(寛永元年)臺灣島を占領してこの地  
にゼーランディア城(安平)を築きて根據となし以て日本、支那  
貿易の互市場たらしめたり、然れども四十有餘年の後支那  
明朝の遺臣鄭成功の爲めに征せられオランダ人悉く追は  
れて臺灣島は再び支那帝國の治下に歸するに至れり、オラ  
ンダの隆盛斯の如くなれども國內各州の統一堅からず且



黨争甚しく商業を重んずるの餘軍備を怠りしを以て遂にフランスの侵略を蒙り殖民地はイギリスの爲めに蹂躪せられて衰ふるに至れり、

第三章 イギリスの革命

女王エリザベタ

女王エリザベタ(一六〇三)の時代はイギリスの黄金時代と

Elizabeth

稱し文藝一時に喚發し文豪シクスピア詩人スペンサー、ベ

Shakespeare

Spencer

ンジョンソン、

歸納論理の新研究を初めしベーコン等皆此時

Bacon

代に生れ國威文運の隆盛を極めたりしが王一六〇三年殂

してジェームス六世(一六〇三)スコットランドより迎へられて

James VI

Scotland

ジェームス一世

イギリス王の位を踐み、ジェームス一世と稱す性放肆にして

帝王神權説を唱へ姦臣權を專にし外交政策に失敗せしか

カロロ一世の無道

ストラッフォード

ば大に國民の感情を害し國會は屢々王と意見を異にして互に相容れざる事多し、ジェームスの子カロロ一世(一六四二)立ちて無道父に勝り國會が王命を奉ぜざるを憤りて前後二回之を解散し、爾後十一年間ストラッフォード及び大僧正

Stratford

ストラッフォード Land の兩人を用ゐて専横の政を施し課するに苛税を以て

Land

し、高等法院を設けて濫りに良臣を罪し、清教徒を苦しめ憲法の紊亂其極に達し人心恟々として安からざりしが偶々

一六四〇年カロロはスコットランドの宗教叛亂を鎮定せん

短期議會

と欲し國會を召集して軍費を要求したり、然るに開會の即

日國會は直に其要求を否決せしかば王は忽ち之を解散し

長期議會

たり、世に之を短期議會と稱す、王更に同年再び國會(長期議

Short Parliament

Long Parliament

會)を召集して軍費の支出を議せしめたるに國會は先づ王

Parliament



國會大に王  
權を制限す

權濫用を彈劾し、爾今國會は王命に依りて漫りに解散する能はざることを議定し、高等法院の廢止を可決せしかば王大に憤り遂に事を干戈に訴へ、王黨を集めて國會撲滅の策を講じ始めたり、茲に於て國會は社會の安寧を維持するを名として兵を募り、茲に王黨と國會黨との間に衝突を來すに至れり、王黨は主に固陋の貴族より成り、國會黨は一般國民の輿望より成れるを以て、勝敗の數始めより明らかにして、國會黨勝を制して王は虜にせられたり、國會黨中過激にウル勇武絶倫、一六四八年部下の將士を指揮して國會を解散し、カロロ王を法廷に導きて其罪を斷じ、翌年遂に王を死刑に處したり、

王黨と國會黨との衝突

王黨敗れて

カロロ王虜

となる

クロンウエル

カロロ王死

刑に處せら

る

イギリス共和政府に變ず

航海條令

イギリス共和時代の隆盛

舊王朝復興せらる

イギリスの政府は、一變して共和政治となりぬ、クロンウエル即ち共和政府の保護者となりて武斷政治を行ひスコットランド及びアイルランドに起れる叛亂を悉く鎮定し、一六五一年航海條令を發布して外國の輸入品を防ぎ、以てオランダの商業貿易に大打撃を加へ爲めに當時商權を專有せるオランダと交戦するに至り、オランダの艦隊敗れてイギリスは世界屈指の海軍國となれり、此の如くクロンウエルは常に内國の治蹟を擧ぐるに止らず國威を海外に宣揚せんことを務めしを以て、當時イギリスの隆盛大に見るべきものありき、然れどもクロンウエルの死するや其子孱弱にして父の業を繼ぐに足らざるを以て國內忽ち亂れ舊王朝遂に復興せら

Scotland

六五一年航海條令

Navigation Act

オランダの商業貿易に大打撃を加へ爲めに當時商權を專有

せるオランダと交戦するに至り、オランダの艦隊敗れてイ

ギリスは世界屈指の海軍國となれり、此の如くクロンウエル

は常に内國の治蹟を擧ぐるに止らず國威を海外に宣揚せ

んことを務めしを以て、當時イギリスの隆盛大に見るべき

ものありき、

然れどもクロンウエルの死するや其子孱弱にして父の業を

繼ぐに足らざるを以て國內忽ち亂れ舊王朝遂に復興せら



カロロ二世

れてカロロ一世の子カロロ二世入りて王位(一六八五)に登  
 れり、カロロ父に倣ふて無道、ルイス十四世の略を取りて王  
 権の擴張を謀り舊教に拘泥して新教を壓するの傾ありし  
 かば一六七三年審派令Test Actを通過し一六七九年人身保護令Habeas Corpus Actを  
 議決せり、新教徒はホイグ黨Whig自由黨を組織して王命に抗し  
 舊教徒はトリーリ黨Tory保守黨を組織して王に加袒するに至  
 り、爾來兩黨の軋轢甚しく國內亦穩かならざりき、

ジェームス二世

カロロ二世歿して皇弟ジェームス二世(一六八五)即位す、暗愚  
 無道遙かに前代に勝りしかば國民一般これを憤り遂に王  
 を廢してオランダのオランジ、公ウィルレム及び其妃マリア  
 (ジェームスの女)を迎へ立つ、一六八八年ウィルレム其妃と共にイギ  
 リスに來りて王位に登りウィルレム三世(一七〇八)と稱す、王  
 オランジッ  
 公ウィルレム  
 王となる

立憲政治の模範多く此時に生ず

名譽革命

賢明にして時勢に通じ、在位十有餘年、憲法を改正し、國民の  
 與望を容れて人權令Bill of Rightsを設け以て王權を制限し、議會の權利  
 を増し其他宗教の制を定め、出版の自由を許しホイグ黨人  
 士を以て内閣を組織し政黨内閣の端を開き、苟も立憲王國  
 の採て模範と爲すべき者多くは此時に生じたり、世に之を  
 名譽革命Glorious Revolutionといふイギリスに於ける政治の進歩と社會民權  
 の發達とはウィルレム三世の治蹟に基するや蓋し疑なし、  
 William III.







列國同盟してフランスに衝る王位継承の亂

つくり以てフランスの勢を打破せんことを務めたり、茲に於てイスパニア王位継承の亂起れり、戦始るやフランスは各國の聯合軍に衝ざるべからず、加ふるにイギリスの將マールボロ及びサボヤのエウジニオ親王共に非凡の勇才を懷きて軍を指揮せしかばフランス軍如何ともする能はず、ブレンハイム(一七〇四)及びマルプラケの二大決戦に、フランス軍殆ど殲きてルイス十四世今や媾和の外爲すなきに陥りしも聯合軍の要求過大なりし故に依然戦を續けたり、偶々イギリスに於てホイグ内閣倒れてトリーリ内閣之に代り平和主義となりマールボロ將軍職を免ぜられ、又ドイツ帝ヨセフ一世不意に歿して其弟カロロ位を繼ぐに至りしかば事情爲めに一大變動を來し、ドイツは今やイスパニア

ルイス十四世大敗したれども猶戦ふ

形勢一變す

ユトレヒトの條約

王位継承亂の結果

ア王の位を要求する能はざるに至りしを以て聯合諸國は自ら其同盟を解き、遂に一七二二年フランス王とユトレヒトに和議を媾するに至れり、翌年ラスタットの條約に依りてドイツも之を承認したり、此條約に因りてフィリポ五世はイスパニア王の位に登ると雖もフランスと合同すること能はざるを定め、フランスは北アメリカの殖民地數ヶ所をイギリスに讓與し、イスパニアのジブラルタル海峡及ミノルカ島も爾來イギリスの領に歸し、ドイツのブランデンブルグ公はプロシアの王號を認定せられ、其他オランダ、サボヤ等各多少の領地を得、オーストリアはイスパニア領ネーデルランド及びイタリアの諸州を得たり、之に反してフランスはルイス十四世の晩年



フランスの  
衰運

豪奢と過度の外戦とにより國庫大に疲弊し、ユトレヒト條約の翌年ルイス十四世殂するや國債堆積して兵力消沈し、國民亦窮迫を感ずるの有様なりき、ルイス十四世即位の初め列國を聳動したるフランス當時の威勢は今やフランスを去りて對岸なるイギリスの手に移るに至れり、之に反してイギリスは一七〇六年スコットランドを合一し國勢大に進み文運また隆昌を極めたり一七一四年ハンノフェル選舉侯迎立せられジョージ一世と稱す、

第五章 イギリス、フランスの東西兩洋に於ける殖民

ポルトガルは新陸地の發見ありてより漸次に北アメリカ

諸國のアメ  
リカに於け  
る殖民

の東岸に殖民し、イスパニアは初め西インド諸島及び南アメリカ地方に殖民したりしが後に北アメリカ、フロリダ地方を占領して新根據地を作れり、尋でフランスはフランス一世の當時殖民獎勵の結果として屢々北アメリカに航し遂にセント、ローレンス河畔に確然たる殖民地を設けたり、是より先きイギリスは東インド航路を發見せんとして北アメリカの沿岸に觸れ、一五八四年ウォター、ラレー始めて殖民地を創設せんことを企てたれども再度事成らずして遂に止みたりしがバルトロメオ、ゴスノルドがコッド岬を發見してバーシニア會社なる者を組織し始めて此地に殖民を設けたる以來イギリスの殖民漸次其根據を固うするに至れり、

イギリス、  
フランスの  
アメリカ殖  
民

イギリスの  
殖民成る



ヨーロッパ諸國の殖民地

爾來ヨーロッパの自由國民は新陸地に領地を得て自由の生活を營まんと希望を懷きて北アメリカに移住するもの縷々として絶えず、殊にイギリス人を最とし、オランダ、スウェーデン等の國民多く來りて遂にニューファンランド、新ネーデルランド、新スウェーデン等の殖民地を設くるに至りたり。是れは十七世紀の頃には夥多の殖民地其境を接したりしが時勢の變遷によりて交々盛衰を來し、ポルトガル、イスパニアの兩殖民地は本國の衰頹と共に其勢消沈しオランダ、スウェーデン等の殖民地は漸次イギリスに併せらるゝに至り十七世紀の中葉にはイギリス、フランスの兩殖民地南北に其勢を振ひ互に領土の擴張に務むるの有様なりき、而してイギリス殖民地は本國よりの監督寛なりしを以て時勢に

殖民地の盛衰

イギリス殖民地の状況

東洋に於けるイギリス、フランスの殖民

東洋に於けるイギリス、フランスの殖民

應じて憲法を制定し、イギリス革命以來自由民主の思想大に發達し政治、宗教の上に著しく其影響を及ぼせり、後に一七一三年ユトレヒト條約の結果に依りフランス殖民地の一部は遂にイギリスに併せらるゝに至りぬ、  
 翻て東洋に於ける兩國の殖民を察するにフランスは一六一六年東インド商會を創立してインド貿易を企てたれども事意の如くならずして一時其念を斷ちたりしが十七世紀の末にインドの南方 Pondicherry の領地を購ふに至りて茲にインド殖民の根據を作り、漸次隆盛に赴き、Duplex は其總督となるに及びて益々勢を振へり、イギリスはエリザベタ朝の頃より東洋交通に着手し、初め Java 島の Bantam 府に殖民せしに一六五八年 Coromandel 沿岸の Madras



イギリス人  
我國と交通  
を開く

クライブの  
事業  
ブラッシー  
の戦

ス附近の地を得るに至りて茲に堅固なる城壁を築きて東洋殖民の本據とせり、イギリス人は亦此頃我國とも交易を開きたれどもオランダ人に妨げられて忽ち衰へぬ、一六六八年イギリスはポルトガルよりボンベイ島を得十七世紀の末にカルカッタを占領したりしに、隣邦ベンガルの領主スラジー、ダウラーこれを嫉みてイギリス人を排斥せんことを圖りしかばマドラスの總督クライブ直に討ちてカルカッタを復し、尋でフランスの殖民地なるチャンドルナゴルを占領し、クライブは後屢々ベンガルの叛を討じてカルカッタ總督となり、一七五七年ブラッシーの大戦にベンガルを徇へたり、  
此の如くイギリス東インド商會は今や宏大なる領土をイ

インドの施  
政

ヘスチング  
ス、インド總  
督となる

インド帝國  
の基礎成る

ンドに有するに至りては自ら之が施政の必要を生じ、一七七三年イギリス政府は遂にインドに干涉するに至り、國會はインド條令を可決してマドラス、ボンベイ、ベンガルの三區域を合併して之を一總督の下に統御せしむることとせり、此時第一代インド總督の重任を拜したるは、ヘスチングス其人にして沈毅にして勇略あり着々としてインド殖民の完成を圖り遂にイギリスの威勢をして全インドに及ばさしむるに至り、以てイギリス領インドの基礎を完うしたり、



第三篇 ロシア、プロシア勃興時代  
第一章 ロシアの勃興

ロマノフ家  
ペテロ大帝

ロシア帝國は一五九八年ルーリク王朝の絶ゆるに當りて王位繼承の争起りしが一六一三年Rurikロマノフ家のミカエル選ばれて王位に登りしより漸次ヨーロッパ列國に重きを爲すに至り、Peter the Greatペテロ大帝(一七二五)即位するに至りて富強の基礎を鞏固ならしめたり、

ペテロ大帝の偉業

ペテロ大帝英邁にして時勢に通達し、ロシアを起してヨーロッパ列強の一たらしめんと欲し、西ヨーロッパ文物の輸入と國土の擴張に畢生の力を注ぎ、軍備の組織より風俗、習慣の末に至るまで西ヨーロッパの風に法り新たに海軍を設け、外

ペテロ、バルト沿岸に海軍を創設せん

人を聘して工業の發達を圖り、學校を興して人智を増進し、自らギリシア教の管長を兼ね、以て孜孜として國內の改良を促がし、又外に向てはトルコ國と屢々衝突し遂にアゾフ地方を占領して新貿易港を黒海の濱に得たり、帝茲に於て躬ら西ヨーロッパに巡遊し、オランダのザンダムZaandamに造船の術を實習し、イギリスに渡りて其海軍の隆盛なる所以を究め、本國に還りて益々新進の策を執りしがば國內保守主義の諸侯往々之を肯んぜずして叛を圖る者ありしがペテロの勇才能く之を平定し、茲に新式訓練の軍を以てスウェーデンの東部を征討し以てバルト沿岸に堅固なる海軍を創設せんことを企てたり、

當時スウェーデンはヨーロッパ北部一圓の地を領し、王方Charles XII.



北方大戦争

スウェーデン王に敵軍を破る

十二世聰明の聞えありて爲めに内政軍備共に整ひしがペテロ大帝之と干戈を交へんが爲めにポーランド及びデンマークの二國と同盟し遂に一七〇〇年に北方大戦争を惹起すに至れり、戦始まるやデンマーク人は直にシュレスウィヒを襲ひゼーランドに突進してデンマーク人を破りてトラベンダルに和議を締結し、直に軍を轉じてロシアに向ひナバルト海の大戦にロシア軍を破り、進んでポーランドを討ちて遂に之を占領し王オグスト二世を廢してレスチンスキを立つ此間にペテロは東方の沿岸を占領して一七〇三年バルト海の東端にペテルブルグ府を創立す、カロロ是を見て兵を南ロシアに進めコサック兵を煽動して叛せしめ相合してロシアを攻めんことを謀りしにペテロの爲めに糧道

ホルタバの役

北方大戦争の結果

を絶たれ且嚴冬に際し一七〇九年ホルタバの戦にスウェーデン軍大敗しカロロ十二世は逃れてトルコに投じトルコを誘ふてロシアに衝らしめんことを企てたれども事成らずしてトルコを追はれ漸く本國スウェーデンに歸着するや四面敵の圍む所となり遂にロシアと和議を結ぶに至れり、北方大戦争はその結果ポーランド王は舊位に復し、デンマークはシュレスウィヒを取りスウェーデンは莫大の領土をロシアに割讓して國勢頓に衰頹しロシアはこれより北方に雄飛するに至れり、ペテロ大帝は都をモスクバよりペテルブルグに遷し、交通貿易の便を開き商工業を奨励して大に國富を増加せしかば形勢爲めにその面目を一新せり、